
BATTLE WORLD

ヴィス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BATTLE WORLD

【Nコード】

N8845U

【作者名】

グイス

【あらすじ】

天月劔飛は真っ白い世界にいた。

それは、BATTLE WORLDへの入口…

召喚術士と聖騎士

ここはどこだ？ 見たところ何もない真っ白い空間。
数分後に現われたのは若い男性。

「……」

男性は何か喋っているようだが、俺には何も聞こえない。
そして、視界が霞むように俺は意識を失った。
何なんだよ一体。

ある朝、目が覚めると腕に違和感を感じる。
気になって腕を見ると、何か腕輪みたいのが付いてるのに気付く。

「え？」

！ 体が動かない！
どういうことだよ！

「うわああああ……！！！！！！！！！！」

俺は奈落の底に落ちたような気がして、気を失う。

「……」

何なんだよさつきから…

「ようこそ！バトルワールドへ！」

突如現れた男が言う。バトルワールド？

視界を意識すれば、乗り物が沢山ある。

いや、その前に…

「誰だおまえ」

「申し遅れました。私、バトルワールドの長をやっております。レンカと申します」

何がレンカだ。馬鹿馬鹿しい。

「ではまず、このバトルワールドのルールを説明いたしましょう」

パチンと指を鳴らすと、モニターから『ルール』と書かれた画面が出て来る。

なになに…

1 参加する者は必ず腕輪を装着しなくてはならない

2 負けたものは死

3 仲間、裏切り、スパイなどなんでもよし

4 最初は必ず職業選ぶ

なんだかわけがわからんな。
全く、こんなことやって何が楽しいのか。
そもそもなんで俺なのか。

「わからないようなので捕捉をさせていただきます。あなたは選ばれたですよ」

「それがわけがわからないんだ！なんで俺なんだ！」

男：いや、レンカは何も言わず、姿を消した。
くそっ！

しばらくすると、アナウンスが掛かる『ケント 剣飛さま、早くお乗りください』と。

「何で俺の名前知ってんだよ」と俺は呟き、ジェットコースターみたいな乗り物に乗る。

俺はドキドキしていた。でも、その裏腹に不安がある。

そりゃそうだろう。なんせ、いきなりなんだからな。

『GO!』とアナウンスが入ったとたん乗り物が動きだす。

乗り物のなかのモニターに職業と書かれた画面あるのに気付く。
そっぴゃ、職業を選ぶんだっけ？

迷いながら選んだのは『サモナー 召喚術士』
理由？ そりゃ、カッコいいからだよ。

『OK』といわれ、乗り物と一緒にトンネルを潜り抜ける。

数分後、いきなり停まって投げ出させる。

いつてえ、頭モロ打ったよ。

……………あれ？ここって…

「…草原？」

何で草原なんだ？

まあ、考えても仕方ないか。

「？なんだあれ」

小さい塊が浮いているんだが…

なんだあれ。っていうかどうやって召喚出来るんだ？

『それは無理です。今のあなたは手元にモンスターがいない状態ですから』

いきなりアナウンスされる。

結構今のビビったぞ。

さて、どうするかな。今の俺には武器も何にもない。

かといって逃げるわけにもいかない。あんなわけのわからんモンスターにビビっては男じゃない！

何か！ 何か棒は…

「どいて」

「え？」

一瞬、何が起こったのかさっぱりわからない。でも、これだけは言える。

モンスターが消えた。

「君、大丈夫？」

「え？あ、はい」

手を差し伸べてくれたのは女性だ。しかも、すらりとしたボディ。まさか、この人が俺を助けてくれたのか？

「こんなところで、何も持たないでいるなんて危ないよ」

「ありがとう」

「私は咲彩、ほしなサーヤ星菜咲彩。パラディン聖騎士だよ」

「俺は劔飛、あまつきケント天月劔飛。サモナー召喚術士だ」

「ところで君はサモナーになったの？サモナーってのは、まずモンスターと契約しなきゃいけないんだよ」

「え？そうなの？」

知らなかった。俺はRPG系のゲームはしたことないからな。とはいえ、格ゲーも好きってわけじゃない。やるとすれば育ゲーぐらい

だ。

自慢ではないが、そういうのは得意だ。

「ねえ、私と手を組まない？」

唐突に言う。

確かに仲間などはOKって言われたが、見ず知らずの人とは手は組めん。

いつ裏切るか解らないし。

そもそも俺はこんな馬鹿らしいモンに付き合っではいられない、帰って学校に行かなくちゃいけないし。

「私が居なければあなた、死んでいたわよ」

あんなわけのわからんモンスター…しかも弱っちそうな奴にやられるわけない。

いや、やられたとしてもダメージないはずだ。あつたとしたら、5か10ぐらいだろう。わからんが。

「あれ、毒持ちよ」

咲彩^{サーヤ}が指を指す。

向けた先は骨。あれはなんの骨だ？

見たところ人つぽいが…

さすがに人だとマズい。

「……人よ」

「え？」

案の定だ。でも、俺は大丈夫だよな！ 友達から訊いたが、俺みたいなジョブは防御とHPが高いって言ってるし！

うん、大丈夫大丈夫！

「今のあなたはLV1、HPはだいたい15あたりだから…2回ぐらい攻撃を受けたら死ぬわ」

「……」

まさか、そんなに弱いとは…

「だから、私と手を組むの。そしたら強いモンスターも手に入れられるし、私もLVがアップする。一石二鳥じゃない」

この女の言うとおりがもしれない。

……ま、暇潰し程度にはなるか。

どうせ戻れるかわからないんだし。

「わーたよ」

しぶしぶハイタッチして歩き出す。

これから俺、劔飛と咲彩との冒険が始まる。

契約

俺がバトルワールドに来てから2日たった。

寝泊りは当然野宿だ。とはいっても、野宿は1日目だけだね。

そっぴゃ、咲彩は何でバトルワールドに来たんだ？

まあ、どうせあの男から強制的に連れてこられたんだろつ。

しかし、俺の契約するモンスターは何になるのか。ザコいモンスターだったらいらないし。

いや、でも実際弱いやつほど強くなる確率が高い。地道に育てていくしかないな。

「劔飛、モンスターよ」

咲彩は戦闘体勢に入る。

くっ、まさか女子を頼りにするとはな。俺ながら情けない。

相手は鳥系のモンスター、バーディア。

ちっこくて素早い代わりに攻撃弱い。多分、咲彩ならやってくれるだろう。

「はあ！」

咲彩の大剣がバーディアに向かって振り上げられる。

しかし、バーディアは後ろに下がり、空へと飛んだ。

それを平然と見ている咲彩。

何してんだよ！

「……ねえ、あの子欲しいとは思わない？」

咲彩が突然言う。何言っただ？確かに欲しいけど、どうやって契約すんだよ。

俺はそんな知識はない、そもそも何であのバーディアのことがわかったさっぱりだ。

なんか、モンスターなら何でも知ってる感じがする。

「大丈夫、あんたなら出来る」

「何を根拠に…」

いや、俺はサモナーなんだ。やらなくてどうする！やり方は俺の中の脳が教えてくれるはずだ。

俺は神経を自分の脳内に集中する。

さあ！教えてくれ！

よし、やり方はわかった。

「咲彩！まずバーディアを弱らすんだ！」

咲彩は小さく頷いて、バーディアに斬り掛かる。

よし！攻撃が当たった！これでだいぶん弱ったはずだ。

「我は召喚術士、汝の名はバーディア、汝は我と契約し、我が剣となり盾となる」

魔法陣に俺とバーディアが包まれる。あと…もうちょいだ。

スパアアンと音がすると、バーディアの姿が見当たらない。どうやら成功したようだ。

……結構、疲れるんだな。

「よかったね劔飛！」

「ああ」

やべつ、膝がガクガクだ。立つのもキツいや。

「んっ」

咲彩？

いきなり腰を降ろしてきた。どういうことだ？

「乗りなさいよ」

「は、はあ？」

何言ってるんだよ！ 何で俺が女に担がれなきゃいけないんだ！
大体俺は…

俺が思いかけたとき、咲彩が言う。

「あんた、今立ってないんでしょ？しょうがないじゃない」

有無も言わずに背負いだした。
ちよっ！ハズいて！

「ごちゃごちゃ言わない、行こう」

この天月劔飛、一生の不覚！

咲彩におんぶされて数分、やっと村に着いた。
見たところ結構荒れている村だな。

「盗人だ！捕まえる！」

「「え？」」

俺と咲彩が振り向くと、その盗人がこちらに向かってきた走ってきた。

よし、さっき契約したバーディアで…

「我は召喚術士。我の声で汝は火炎の中からその姿を現す。バーディア！」

魔法陣からバーディアが現われる。
さて、行くぞバーディア。

「バーストフレイム！」

バーディアは炎を纏い、盗人に向かって突出する。

「っと」

「何？」

避けられた…そんなバカな！

何なんだこの盗人は。バーストフレームを避けれるなんて…！

「流斬！」

大剣で横に斬り裂く、が…

「よっ、甘い甘い」

咲彩のわざでもダメか。ホントに何モンなんだ。
咲彩も落ち込んでるみたいだし。

「えっ？もう終わり？」

コイツ、舐めやがつて…！

ぶっ飛ばす！絶対えぶっ飛ばすうう！

「バーディア、炎灰^{えんかい}！」

バーディアの翼が鋭い炎と化す。
そして、素早く貫く。

「よっと…ニヒヒ、お前ら弱いね」

「チッ」

また避けられた。どういう…
いや、考えても時間の無駄か。

「やるじゃない」

「咲彩！」

何のんきなこと言ってる！相手は強いんだ。

……そうか、そういうところか。咲彩はコイツを…

「ねえ、あんた名前は？」

「俺様か？俺様は御纏ごでんいちほう一初ってんだ」

「そう。なら、私たちの仲間にならない？」

お、おいおい…

「はあ？」

そりゃそういう反応するよ。

でも、確かに腕はよさそうだが、俺らの仲間になるのは…

「無理に決まってるだろ？俺様は盗賊シーフだ。お前らに付いていくほど人間出来ちゃいないんだよ」

ま、妥当だね。俺もこんな奴仲間にはかないもん。

「そう、残念ね。君とならいいパーティになりそうだったのに。行きましょ。劔飛」

「あ、ああ」

俺と咲彩は村の宿屋で体を休めた。
ふう、今日1日大変だったな。バーディアとも契約したし、これから旅をしていく仲間だ。

「頼むぜ、バーディア」

契約（後書き）

（前衛系）

ファイター・ウォリアー

戦士

アマソネス・アマゾン

女戦士

バーサーカー・ベルセルク

狂戦士

マジックウォリアー

魔法戦士

ソードマン

剣士

グラディエーター

剣闘士

エグゼキューショナー

死刑執行人

ソルジャー

兵士

ガード

衛兵

ドラグーン

竜騎兵

インベリアルガード

近衛兵

ディフェンダー

防衛者

ガーディアン

守護者

ジェネラル

将軍

ナイト・キャバリア・シュバリエ・リッター

騎士

パラディン

聖騎士

テンブルナイト

聖堂騎士

クルセイダー

十字軍

バンディット

山賊

海賊（パイレーツ・バッカニア・バイキング・コルセア）

マーセナリー・ハイアリング

傭兵

バーバリアン

蛮族

ジェノサイダー

虐殺者

侍

ロード

ハイランダー

マーチャント

商人

クラフトマン・クリエイター

職人

ブラックスミス

鍛冶師

格闘系

武道家

モンク

拳聖

空手家

ごろつき

喧嘩師

軽業師

気功師

護身術士

パンクラチオン

グラップラー

ストライカー

軽装・中衛系

シーフ・ロバー・ルーター・ブリガンド

盗賊

ならず者

チェイサー

追跡者

アサシン・スタッパ

暗殺者

レンジャー

野伏

忍者

ベガー

乞食

シフシ

放浪者

バード・ミンストレル・ドルバドル

吟遊詩人

弓使い（ボウマン・クロスボウマン）

射手
アーチャー・シューター

猟師・狩人
ハンター

狙撃手
スナイパー

（魔術師系）

見習い（アプレンティス）

隠者
ハーミット

男の魔女
ウオーロック
ウィッチ

魔女

魔術師（ウィザード・マジックユーザー）

妖術士
ソーサラー・ソーサレス

呪術師
シャーマン
イリユージョニスト

幻術師
セージ・ワイズマン

賢者

獣使い（ビーストテイマー・ビーストマスター）

学者
スカラー

占い師
フォーチュンテラー

メイジ

アークメイジ

バトルメイジ

メイガス

デアボリスト
ウイスパー

囁く者

召喚術士
サモナー

死霊術士
ネクロマンサー

精霊術士
エレメンタリスト

錬金術師
アルケミスト

占星術士
アストロジスト

く僧侶系く

ドルイド僧

薬草使い（ハーバリスト）

クレリック
牧師

祈祷師・退魔師・除霊師
エクソシスト
ハイエロファント

法皇・教皇

ハイプリステス
女教皇

カーディナル
枢機卿

ビショップ
司教

プリースト
神父・司祭

ディーコン
助祭

アコライト
侍祭

この中ジョブを選んで、名前を考えて下さい。

必要な事項は名前、性別、ジョブ、備考などを書いてくれるとありがたいです。

姫の救出へ！

「さて、そろそろ行こう」

とある朝、咲彩が言う。確かに、もう出発しなきゃな。
シーフがいる村なんて長居はしたくない。
バーディアの鍛練もしなきゃいけないし。

「お世話になりました」

「気を付けるんだよ」

「はい」

宿屋のおばさんにも言ったし、後はこの村を出るだけだ。
咲彩は「あの盗賊の子、欲しかった…」とか言ってる。いやいや、
さすがにあいつを仲間にするのは俺が困る。
なんか体が拒否反応するんだよ。

歩いて数分、俺は怪しげな影を見つけた。誰だ？

「おい、こそこそやってないで出てきたらどうだ？」

「ばれましたか」

出てきたのは黒い帽子を被った女。
見た目からして魔女ウィッチだろ。

「名を名乗れ」

咲彩が言う。

しかし彼女は、何も言わずこちらに向かってき歩いてきた。

「私は魔女、^{ウィッチ}ケイト＝ミドルトンですわ」

「で、そのケイト＝ミドルトンが俺らに何用だ？」

ケイトは水晶を出すと、その中に文字が浮かび上がる。
ま、ウィッチだから当然か。

「…これって…」

咲彩が驚く。無理もない、王の娘が連れ去られたみたいだからな。
でも何で俺らなんだ？普通強え奴を呼ぶはずなんだが……まあいいや。

「では、付いてきてください」

ケイトの言うとおりに付いていくと、デカイ屋敷にたどり着いた。
結構デカイな…相当な大富豪だろう。

「お入り下さい」

「「おお」」

中も結構広いな。さすが王様ってところか。
ケイトが「こちらへ」と言われ、着いたのが小さい扉。

俺ん家に比べりや断然でかいけどな。

「ん？何だお前ら」

現われたのはラフな格好した奴と…

「あ、お前ら！」

「いつかのシーフ！」

そう、なぜかあん時の盗賊^{シーフ}がいる。

とうとう捕まったか？

等と考えていると、ぬつ、と鏡が出される。

咲彩は「ヒイツ」と悲鳴を出し、俺の後ろに隠れる。

コイツ、怖いのが苦手なのか？

「おっちゃん、こんなとこで何してんだ？」

ラフな格好した男が言う。

ま、俺としても訊きたいしね。

「ワシの名はユウキ・カタノ、見ての通り王をやっておる。しかし、ワシはオーガに娘を攫われて、拳げ句の果てに鏡に閉じ込めたのじや」

おいおい、そんな童話の中の話じゃないんだから……いや、今の俺らにはモンスターとかいるしな。

そもそも王はそんなことでウソを付かないはずだ。

第一、よくよく見ると結構強かったシーフもいるし、強そうな男もいる。

俺らはオーガを倒すべく為の準備をした。

「そっぴゃ、お前なんて言うんだ？」

シーフが言う。

確かにそつだ。連携の時に呼び合わないと困る。それに、自己紹介ぐらしいしなとな。

「俺様は御纏一初。盗賊だ」
シーフ

「俺は吾神鍊斗。あがみレント ジョブは鍊金術師。アルケミスト よろしくな」

「私は星菜咲彩。バラディン 聖騎士よ」

「俺は天月劔飛だ。ジョブは召喚術士」
サモナー

それから俺らは次々と自己紹介をしていき、意外なことが発覚した。それはこの鍊斗つて人は12の時からバトルワールドにいるらしい。まあ、見たところ強そうつて思つたけど、案の定とは…

「おーい、武器改造終つたぞー」

鍊斗さんが叫ぶ。

鍊斗さんはアルケミストだから俺らの武器を改造してくれてるんだ。結構いい人だし。

で、俺はバーディアしかいないから改造出来ない。咲彩は冷気を纏つた大劔『アイシクル』、一初は雷を纏つた短劔『

サンドル』、そして鍊斗さんは毒を纏ったハンマー『ポイズター』。よくもまあここまで改造したものだ。

「うわっ、すごい」

咲彩が言うのは無理もない。ここ全体が凍り付くほど冷気が漂っている。

つと。そこで鍊斗さんが捕捉。

鍊斗さん曰く「魔術師^{ウィザード}がいれば尚スゴい武器が創れる」と言っている。

「おい！そろそろ行くぞ！」

一初がとことこと歩いていく。全く、落ち着きが無い奴だ。

それに年齢的にお前が一番年下じゃないのか？ なぜに敬語じゃない……いや、今更だが。

歩くこと約数時間。怪しげな洞窟を発見した。

ここか…なんか不気味だな。

「ぶ、不気味なところね」

やっぱ女子なんだな。結構びびってる。

つと、そんなこと言つと殴られそうだな。でも、それを実行しようとしているバカが1人いる。

俺知らねー。

「お前、意外とビビりなんだな…ってイテテテテ……！！！！！！ア
イアンクローは痛い……！！！！！！！！！！」

ざまあだな。

「おい、どうでもいいが進まんのか？」

っと、そうでした。取り乱してしまった。

こうして俺らはオーガを倒すため、洞窟に足を踏み入れる。

虐殺者

「ねえ、鍊斗さん。鍊斗さんは何で姫を助けに？」

「ん〜、俺あは曲がったことが大ッ嫌いなんだよな。王をあんたとこへ閉じ込めて何がいいんだか」

「コンマ置いて「はあ」と言う鍊斗さん。結構正義感が強いんだ。それに比べてこの盗人は何で参加したんだ？ま、どうせ面白半分で来たんだろう。」

「ヘッ、俺様はオーガをぶっ倒して強くなる！」

何だ。意外と普通なんだな。

「あら、私と同じ理由とはね」

咲彩もこの盗人と同じ理由か…なんか分かる気がする。俺もこの世界^{バトル}に^{ワールド}来たからには少しでも強くななくちゃな。

などと考えていると、早速現われたのは漆黒と深紅の翼をもつコウモリ、コクバッド。確かコイツは…

「たありゃあ！」

俺がこのモンスターを確認する前に、一初は攻撃を仕掛けた。このモンスターの特徴…それは水の力。となるとバーディアはキツイ。なら、咲彩の『アイシクル』だ。

「咲彩、コイツは水の力を持っている。今の咲彩が適任だ」

咲彩は「こくん」とうなずき、力を溜める。
一方一初はコクバッドと乱戦している。思った以上に強いのか、手も足も出てない。

「退いて！」

咲彩が叫ぶと一初は横に避ける。そして咲彩は退いたのを確認して真上にジャンプ。

「一我が冷気は汝の命を奪わんとする（オア・フリンギス・イト・レピット・アニマン・トゥーム）。吹雪の斬撃！」
レジェン・イン・スノーストーム

コクバッドめがけて吹雪のような斬撃が襲い掛かる。
よし、これでなんとか倒せた。

「ふう」

さすが聖騎士だ。疲れは少しだけとは。
んで、一初の様子を見ると結構疲れてるっぽい。まあ、コイツに
つては対モンスターは初めてだから仕方ない。
そして俺らは次々と洞窟の奥に進む。

「行き止まりだな」

鍊斗さんの言うとおり、目の前は壁で、何も仕掛けなどなさそうだ。

「仕方ない戻るか」

と、その時。ギギッと扉が開く音がする。隠し扉か。

中に入ると辺りが暗くてよく見えない。

「な、なあ。あれ人じゃないか？」

一初が言う。俺も目を凝らしてみると、男性が椅子に座っているのが見える。

確か俺らはオーガを倒しに来たはずなんだが…

「フンッ」

そういつて放り投げたのは…

「オーガの首……」

多分、鍊斗さんか一初が言ったんだろう。俺は驚き過ぎて聞く耳持たなかった。

いや、今はそこじゃない。

相手はあのオーガだ。例えどんなに強いヤツが1人で戦っても無傷で生き残れる奴は居ない。

しかもこの男は返り血を浴びている。否、浴びまくっている。

「俺様、あの男見たことある…」

「え？」

少々びびりながら言う。そう言えば俺も見たことがあるような……

「劔飛、咲彩、一初。逃げろ…」

「なっ！？そんな…鍊斗さんを置いて逃げるなんて——」

「——コイツは全国指名手配犯。無差別殺人鬼……」

男を見て鍊斗さんは言う。

「岩見祥吾だ！」

そう、この男は鍊斗さんが言う無差別殺人鬼、岩見祥吾。
数年前脱獄して行方不明となっていたが、まさかこんなところにいるなんて……！

「まずは……誰から殺^やる……？」

う、動けない……体が……

「まずはお前からだ……」

サッと現れたところは一初だ。
くそっ！ 身体！ 動け！

岩見は一初の頭を握り締める。くっ、こんな時に何で……！

「あ……ああ……くっ……」

何で動かないんだよ！

「俺の眼は誰もが跪^{ひざまず}く……お前らはここでコイツの死刑を見ている」

出てきたのは血塗れの刀。

コイツ、まさか一初の首を刎ねるつもりじゃ……！

亡くなった友のために（前書き）

今回は雨季さんが投稿してくださったオリキャラが出ます。

亡くなった友のために

一初…俺はなぜお前を守れなかったのか…

俺は弱い。悔しい。何も出来なかった故にお前を死なせちゃって…

もう、いやだ。俺はもう戦いたくない。もう誰かの死は見たくない。抜け出したい。

もう……いやだ……

「劔飛…」

「劔飛。立ち止まっている時間はない。オーガを倒したが、王の娘を助けに行かなくてはならないのだ。気持ち分かるが、いつまでもここにいたら一初だって安らかに眠れない」

「何で……何でアンタは人が死んだのに平気でいられるんだよ！」

「平気なわけないだろ！」

鍊…斗さん……？

「俺らがやらなきゃいけないことはなんだ？一初の墓の前でメソメソ泣くことか？違うだろ！俺らは姫を助け、王を鏡の中から出すことだ。違うか？」

そうだよな。いつまでもメソメソ泣いていたら一初に笑われちゃう。俺は鍊斗さんの言葉で自分が何をしなきゃいけないのか分かった気がする。

まずは姫を助け、王を鏡の中から出す。考えるのはそれからだ。それに…あの岩見ってヤローをぶん殴らなきゃ気が済まねえ。

今の俺は無理だ。それは事実。だが、そこから強くなるってこと証明してやる。

その為にも仲間を増やしていこう。

「ねえ劔飛。あそこの扉って…」

咲彩が指差したのは奥にある扉だ。ここに閉じ込められている可能は大。なら、急いだ方がいいな。

俺と鍊斗さんは扉の把手に手を掛けて、一気に引く。すると、目の前に姫がうずくまっていた。

中は暗いし少し寒い。それにクモやら虫がちよこちよこ歩き回っている。なぜ姫をこんなところに閉じ込めたのかは不明だ。だが、これで姫は助けた。後は王を元に戻すのを…アレ？

「なあ、咲彩。王を元に戻す方法——」

「——知らない」

だよなあ、どうすりゃいいんだよ。オーガは死んじまったし…はあ、あの岩見ってヤロー…それを知りながらアイツは…！

「あ、あの…！」

突然姫がみんなに言う。「もうパパは鏡から抜け出したよ」と。俺らは急いで屋敷に戻り、王の無事を確認する。

すると王は既に鏡から出ていて、ご飯をもりもり食べていた。

つまりあのオーガを倒せば鏡から抜け出せるって事ね。

その晩王は俺らにご飯をご馳走してくれた。結構美味かったりして。それからこの屋敷…否、この町を出る日が来た。

鍊斗さんは俺らと共に旅をする事になった。いきなり「俺を仲間に

してくれ！」なんて頼むからビックリした。

咲彩は引き続き俺と一緒に旅をする。俺としては嬉しいことだ。『仲間』が出来るんだからな。だが、その裏腹に『裏切り』という行為も考えられる。

裏を掻いたり掻かれたりのバトルワールド……やってやるよ。

俺らはシラマ砂漠を歩いている。確か、この先にミズナ村という村があるそうだが……ホントにこのルートで合ってるのかよ。辺りは見回しても地平線だし、何もないじゃん。

そんな時、1人の左腕がない男性と会う。その姿はレザー装備にボロボロのスカーフとマントを身につけている。髪は金髪で背が高い。恐らく外人だろう。

「初めまして、ロン・ハワードです」

「こちらこそ、天月劔飛です」

「吾神鍊斗だ」

「星菜咲彩よ。よろしくね」

この男の用件は俺らと同じミズナ村を目指している。だが、一向にミズナ村が見えないから不安になり、同行をお願いされたのだ。

確かに、進んでも進んでもミズナ村に着かない。これじゃ俺らは飢え死にだ。それだけは回避したい。

「感謝するぜお前ら！」

ロンが俺らと同行してから数時間。さすがに疲れてきた。
咲彩の『アイシクル』だけじゃ厳しいよ。それにこの状況でモンスターが出たら厳しい。今の俺らはこの暑さで体力を奪われているんだ。そこにモンスターが来たら一溜まりもない。

「ん？」

錬斗さんがいきなり停まり、息を潜めた。何かに気付いたのか、武器^{ボイ}を構える。

咲彩とロンも、錬斗さんに続き武器を構える。なら、俺もバーディアを喚びだそう。

「我は召喚術士。我の声で汝は火炎の中からその姿を現す。バーディアア！」

それぞれが息を殺し、モンスターが来るのを待つ。

そこで1つ疑問が出来た。

それは…

『ロンは片腕だけで戦えるのか？』

ロンの武器は大剣。故に『片腕だけでその大剣を操れるのか』と俺は疑問視してしまう。

だが、そんなことも忘れ去られるようにモンスターがウジャウジャ出て来た。

あのモンスターの名は『クラブヘッド』。砂漠で生息するのが特徴な力二。

あの前脚のハサミに挟まれたら木っ端微塵だ。

それにあの力二の能力は、地面に潜り、相手の真下から引きずり、地面の中で食すというえげつなことをするモンスターだ。

「相手は50…いや、60体か……」

ロンはぶつぶつと言って、ある事を言う。それは…

「俺ら4人なら30分で行けるだろう」

俺らの実力を知らないで言ってるのかはわからないが、たった30分で60体のモンスターを倒せるのか…？ いや、倒してみせる！俺とて無駄にここまで歩んできたわけじゃない。ロンの言うとおり30分で終わらず。否、30分以内で終わらず！天国いる一初に笑われないように、絶対30分以内に終わらしてみせる。

亡くなった友のために（後書き）

まだまだオリキャラを募集しております。

必須項目は

名前

年齢

性格

生い立ち

容態

武器

防具

能力（二次小説ではないので、チート過ぎはダメ）

例：何でも武器、道具を作れる等。

→はダメ

職業

です。

上記の通りに書いてくださらないと、混乱してしまいます。

ちなみに投稿してくださったオリキャラは、どこで使うかは秘密です。

使わないことはありません。

最後に天月劔飛の年齢は18、星菜咲彩は17です。

判らないことがあつたら、遠慮なくメッセージを下さい。
では、投稿待ってます。

VSクラブヘッド

「バーディア！バーニングスラッシュだ！」

俺とロンと鍊斗さんと咲彩はクラブヘッドと戦っている。

俺とロン、鍊斗さんと咲彩のコンビで倒すことに決まった。さて、コイツの戦闘スタイルをお手並み拝見と行くか。だがその前にコイツらをなんとかしなくちゃな。

つつてもこれじゃキリがない。手っ取り早くコイツらを倒す方法を見つけないでは。

俺は必死に考えを探ってみた。こういう時のサモナーだろうが！くそっ！

「……待てよ……」

相手は主に地中で暮らしている。ならば地面ごと叩けばいい。だが、どうやって地面ごと叩く。生憎俺のバーディアじゃ力不足だ。くっ、こういう時に地のモンスターが欲しい。いや、無い物ねだりしてる時間はない。他に方法を…

「！」

「たああああ！！！！！！」

ロンは片手だけでクラブヘッドを振り払う。

すげえ、片手であの大剣を軽々と…それにあの破壊力……いけるかもしれない。

ロンのあの破壊力があれば倒せるかもしれない！

「ロン、話がある」

劔飛SIDE OUT

ロンSIDE

ケントが俺に話があると言って、側に寄ってきた。

耳を傾けると、俺にあることを言った。それは『地面を叩け』という提案。

ケントのことだから何かしら策があるのだろう。

俺は深呼吸をして、大剣を構える。

「だいしんがい大震鎧！」

思いっきりジャンプして、勢い良く地面に突き刺す。

すると、クラブヘッドが沢山出てきて宙を舞う。なるほど、ケントはそれを予想していたのか。

俺が驚いていると、ケントはバーディアに攻撃の指示を出す。

「バーディア！えんしょうれつ炎璋烈！」

バーディアの翼とクチバシが燃えだして、空中にいるクラブヘッドをある程度倒した。

どうしてある程度なんだ？ まだいるだろう。

「後はお前の仕事だよ。ロン」

そついう事か…なら、お言葉に甘えて…

「スピードダム……！」

素早さが上がる術を自分につけ、横に構ええる。

そして1コンマ置いて、高速で斬り付ける。俺の能力はちょっと厄介だ。スピードアップならスピードアップ。と、1つしか出来ないから何回も何回も斬り付けなければならない。

よし、LAST！

「はっ！」

最後の1体を渾身の一撃で倒した。

ふう、やっぱり疲れる。あまり使わないほうがいいな。

ロンSIDE OUT

錬斗SIDE

「たああありゃああ……！！！！！」

次々と俺のハンマーで殴り飛ばす。ハッ！ アルケミストだってやるときややるんだよ。

普段は武器を鍛えてる俺だが、ここぞと言うときのために鍛えてよかった。

チラ見で咲彩の方を見る。

すると咲彩はクラブヘッドを容赦なく斬り刻む。さすがパラディンと言ったところか。

「昇黎氷斬！」
しょうりひやうせん

咲彩は2回斬り上げ、そのまま地面に叩きつける。
全く、あの小さい身体にどんなパワーを秘めているのやら。
それよりもあのクラブヘッドのハンマー…俺の武器を進化するのに
最適だ。よし、持って帰ろう。

その前にクラブヘッドを倒しないと武器が造れない。倒して強えハンマー造る。

「峨梁塵碎！」
がりようてんさい

ハンマーを回転しながら叩く。一体一体しか倒せないが、攻撃力が
かなりある技だ。

もうちょつと鍛えたほうがいいな。それに改良の余地がある。あと、
この『ポイズター』も改造したら、より威力が増すだろう。

さて、劔飛達の方はどうか？

そう思ってそっちに目を向けると、すでに全滅していた。すっげえ、
こっちはまだまだだってえのに。それにロンってヤツ、何者なんだ
？ 片手だけであの大剣をフツーに振り回すなんて有り得ないだろ
う。

いや、実際ここにいるんだ。否定出来ねえか。

鍊斗SIDE

咲彩SIDE

うつわ、もう劔飛達早く倒しちゃったよ。さすが私の見込んだ人。

例の作戦を実行するにはまだ早そうだし、もうちょっと様子見ようかしら。

にしても、ウフフ…バカな男よね。私の演技に騙されるなんて…さすが私、天才女優と言っただけあるわ。

何としても私はこのバトルワールドで天下を取る。そして私を貶めたプロデューサーに借りを返さなきゃ。

「フフツ…アハハハッ」

この恨みは消えない。絶対にね。

咲彩SIDE OUT

何ものかに取り憑かれたように笑う咲彩。

そしてこのバトルワールドとは何か…はたまた、咲彩の過去とは一体何か…謎が多すぎるこのバトルワールド。その正体はいかに…？

V S クラブヘッド (後書き)

バトルワールドとは一体何なのか…それはまだ明かされない…

2つの職業

「だから！俺はお前を信用してだな」

「はいはい」

どうも皆さん。天月劔飛です。「厨二っぽい名前だな」とかその辺のツツコミは無しね。

で、今口論してんのがロンと咲彩。原因はこのシラマ砂漠を東に歩いているときだった。

何せ暑いから、咲彩のアイシクルで涼しもうとしていたが、ロンは「いや、お前の魔力が減る」と言うが、対する咲彩は「そのくらいじゃ減らないわよ」と言う。それで今に至のだ。結構暑いのにこの2人のせいで余計に暑くなる。

「おかしいな……確か、この方角で合ってると思うんだけど……」

「何してるんですか？錬斗さん」

「いや、俺ら道迷ったかも……」

錬斗さんの発言で一瞬時が止まったように感じた。

そっか、迷っちゃったか……まあ、しょうがないよね。俺ら初めて来たから迷うのもうなずける。

でも、ガチでどうしよう。とりあえず近くの村……って、砂漠にそうそう村なんてないよな。

「あ、村発見」

「『『ウソお!?』』」

俺と鍊斗さんとロンが咲彩の一言にツツコミをいれハモる。
ミズナ村以外ないはずなんだが……怪しいな。
そう思いつつ俺らは咲彩が言う村に行く。

さてと、まず村の第一印象はとても貧しそうだ。村のみんなが俺らを睨んでいる。どうやらここはよほど荒れているようだな。
さて、この様子では俺らを歓迎なさっているようではない。

「劔飛、村の様子が変だ」

「ええ、何かに操られているようだわ」

鍊斗さんと咲彩が戦闘体勢に入り、俺もバーディアを召喚。ロンもドデカイ大剣を構える。

そして村の1人が鍊斗さんに襲い掛かる。すると、鍊斗さんは躊躇なく村の1人をハンマー ポイスターで叩きつけた。ちよっ！ 何してっ……！

「よく聞け、コイツらの正体はモンスター『スケルス』だ」

スケルス…人間に擬人して獲物を捕える。コイツの厄介なところは人間に上手く擬人して、サモナーでも見分けることが出来ない。なのに鍊斗さんは……

「おい！劔飛後ろだ！」

「えっ？」

ふと後ろを見るとスケルスが俺に攻撃をしようとしている。
しまった！ボーツとしていたら後ろを取られた…っ！
くっ…そ、ここで終わりかよ！

「入江流一式 四之舞 “ぐんじょうさいか群青催狩”」

俺の顔スレスレに矢が飛んできた。あつぶねえ…だが、今の矢が無ければ俺は死んだかもしれない。

「全く、僕が居なければキミ死んでたよ」

現われたのは黒の髪に赤い目。髪の長さは腰まである。恐らくこの娘は射手アーチャーだろう。

「速攻で終わらすよ！」

女性は5本の矢を構えて上に放つ。すると、雨のようにスケルスに当たる。すげえ、あんな的確に当たるなんて…いや、感心してる場合じゃない、俺もやらなきゃ！

「バーディア、クロスバーニング！」

翼を広げ、右、左、上、下へと十字を描くように突撃する。そして最後は炎を纏ってスケルスの腹めがけて突進。
だが、数が多いのかあまり減ってない。

「もう！これじゃあ僕が1人でやったほうが数倍マシだよ！」

そう言っと、彼女は矢を取り詠唱を唱え始めた。

「風の精、我の矢に汝の力を与えよ。風の乙女『シルフ』」

矢から凄まじい風が起こる。これが、風の精霊の力…あれ？何でア
ーチャーなのに精霊を……？

「行くよ、シルフ」

『わかったわ』

！？ 今変な声が…気のせいかな？ でも、確かに聞こえたような…
しかも女性の声。咲彩、鍊斗さん、ロンに聞いても知らないと言う。
やっぱ気のせいかな。

「ふうがれっしょう
風雅烈昇！」

勢いよくスケルスに向かって放つ。本当に何者なんだ？精霊を使う
わ弓は使うわ。余程の者とみる。
そんなことを思っていると、ぬっ、女性が顔を出す。

「な、なんだよ」

「キミ、僕のこと知りたい？」

「え？あ、いや…」

正直何言っているのかわからなかった。だって、敵も味方もわから
ない奴から自分を知りたいと言うのは怪しい。少し気にはなるが、
あまり気にしないほうが良い。それが安全だ。

「いや、俺は別に――」

「しょうがないなあ。教えてあげるよ」

話聞いてな！ 俺一言も教えてなんて言っただけだよ！
考えていた俺がバカみたいじゃん！

「僕の名前は入江安曇。いりえあずみアーチャー エレメンタリスト
射手と精霊術士」

ジョブが2つ… っていうことだ？ ジョブは1人1つのはずじゃ…
…あのレンカって奴も2つまでとは言っただけだ。

「知らないのかい？ LEVELが30になるとジョブが2つになれるんだよ」

知らないも何もそんなこと聞いていない。いや、聞かされていない。
それから俺らは入江の話聞いて1つ気になった単語がある。

年に一回開催されている大会『Battle of battle』だ。

その大会で優勝すれば元の世界に戻れると言われている。でも、参加資格はLEVEL50以上。つまり俺らはまだ出れないのだ。これじゃあ歳を取って死んじゃまうじゃねえかと思っただが、ここでの俺らは不老になる。

で、この話はロン、咲彩、する知らなかった。

「俺も知らなかった。まさか、ここから出られるなんて」

長年いた錬斗さんでさえ知らなかったのか。全く、ますますわからなくなっちゃったよ。このバトルワールド。

そして、入江はこんなことを言う。

「しょうがないよ。だってハーツ大陸にはそんな情報届いてないらしいし」

ハーツ大陸？

俺が疑問の顔をしていると、鍊斗さんが捕捉するように言う。

「ハーツ大陸つつうのはこの大陸だ。この世界ではこのハーツ大陸、クローブ大陸、スペース大陸、ダイアンツ大陸の4つの大陸で成り立っている。まだまだ強エヤツはいるってこと。ま、俺はハーツ大陸を出るのは初だけどな」

なるほど、そういう事か。

何はともあれ、もうこの村とはおさらば、そして多分咲彩は…

「私たちの仲間にならない？」

や、や…

「「「やっぱいい」…」「」「」

俺とロンと鍊斗さんは声を揃えて膝をつく。うん、まあ、想像していた通りなんだけどね。で、返事は…

「無理」

はい、最悪の二言ですましたー！ しかも真顔でー！

「じゃあ、僕帰るから」

帰るっつってもどこに行くんだか。

まあ、それはともかく、俺らの目的はミズナ村だ。早速いかなくちやな。でも、どこにあるのやら。

「劔飛、なんか後ろに紙が…」

ロンが俺の後ろに貼ってあった紙を俺に見せ付けてきた。

「あんの女^{アマ}アアアアアア……!!!!!!!!!!」

2つの職業（後書き）

次回はこれまでに登場したキャラを紹介したいと思います。

キャラ設定（前書き）

仲間になったキャラです。

キャラ設定

名前：天月劔飛
あまつぎケント

性別：男性

年齢：17

職業：召喚術士
サモナー

特殊能力：モンスター情報
モンスターについてなら誰にも負けないほど詳しい。ただし、ハーツ大陸に住むモンスターだけ詳しいので、他の大陸のモンスターは知らない。

身長：169cm

体重：60kg

髪型：カジュアルショート

髪色：えんじ色

瞳：サックスブルー

契約モンスター：バーディア（炎属性）

前：星菜咲彩
ほしなサーヤ

性別：女性

年齢：18

職業：聖騎士
パラディン

特殊能力：大嘘
オールフィクション

彼女が演じると本当のようになる。

身長：157cm

体重：54kg

髪型：ポニーテール

髪色：水色

瞳：ダークブラウン

武器：アイシクル（氷属性）

名前：吾神錬斗
あがみレント

性別：男性

年齢：18

職業：錬金術師
アルケミスト

特殊能力：属性追加

彼が鍛えると何かしらの属性が付く。ただし、ランダム。

身長：178cm

体重：77kg

髪型：ざんぱら

髪色：金髪

瞳：漆黒

武器：ポイズター（毒属性）

名前：ロン・ハワード

性別：男性

年齢：25

職業：剣士
ソードマン

特殊能力：馬鹿力

片手だけで大剣を振るほど力が強い

身長：188cm

体重：98kg

髪型：ツンツンヘア

髪色：金髪

瞳：青

武器：キング・リューザ（属性なし）

バラバラになった仲間 劔飛&ロンSIDE

「さて、なぜ俺はここにいるのかな？」

「……」

無視ですか…

うむう、まずはここに来るまでの記憶をたどろう。

俺らは確かミズナ村に着くには最短の道の『コクラ洞窟』に行っただけ、途中から道に迷い、練斗さん達と離ればなれになりそれから……そう、確か謎の女2人に連れ去られてここにいるんだ。

「おいっ！お前らの目的は何だ。悪いが、お前らが思っているほど金はないんだ」

「ああ、いいのいいの。ウチらのお金目的じゃないし。ウチらの目的は……」

俺の前に立ってこういう。「アンタを仲間にする」と…

まさか俺がスカウトされっとはな。しかも見たところ海賊っぽいし。てか、何で山の洞窟に海賊いるんだ？近くに海でもあるのか？

「ウチたちは海賊をやっている」

知ってるよ。だって格好がそれっぽいし。

「そしてウチはその海賊の船長をやっているんだ」

マジか！？ そんな風には見えないぞ！？

「でも、ウチたちはかなり弱い。他の海賊たちにも相手にされない」

いや、それは逆にいいのでは？ ん？いや、待てよ…まさか…

「民にも相手されない」

やっぱりー！！ だいたい予想は着いていたけどいざ聞くと切ない…っ！

「綾子さん、さすがにそのウソはばれるのではないでしょうか？」

「ウソかよ！俺ガチで信じちまったよ！」

「えっ？アレを信じたの？やっすーいー」

あれ？目から水が流れてきたぞ？
でも、1つだけ気になるのがある。なぜ俺を連れ去られたのか。鍊斗さんや咲彩ならまだしも俺はここに来たばかりだ。そんなに強くはない。むしろ弱いほうだと思う。

「なあ、何で俺を仲間にするんだ？どうせなら俺より強いヤツを仲間にしたほうが…」

「それはダメなんです。私たちに必要なのはサモナーなんです。他の人たちはいりません」

サモナーでないといけない理由でもあるのか？ それとも、何か企んでいるとか……

いや、考えすぎだろうか。そもそもサモナーと何の関係が――

「船長！デットゴーレムがこちらに向かってきます！しかも、かなりの数で…」

1人の乗組員が慌ててこっちに来る。

それにデットゴーレム…確か、近づくヤツを容赦なく殴り殺すというモンスター。しかし、それはヤツらの縄張りに入った時のみだ。普段は大人しいと聞いたことある。

「なんだって！急いでデットゴーレムを――」

「待てよ」

俺はデットゴーレムのところに行こうとする船長を止める。少し聞きたいことがあるんだ。デットゴーレムに関して。

「な、なによ」

「お前さ、デットゴーレムに何かしたのか？」

「っ…」

よし、動揺した。何か隠しているな。この調子で追い込めば…

「キヤー！」

デットゴーレムが1人の女性を殴りかかろうとしたその時。

「麻美！」

船長がトライデントを取出し乗組員を助ける。

だが、デットゴーレムは2体。そのもう1体のデットゴーレムは後ろから船長に向かってパンチを放とうとしている。

「させるか、バーディア！」

バーディアを喚んで、船長への攻撃を防ぐ。うし、ギリギリだ。

「バーディア、相手はのろまの代わりに防御・攻撃がかなりある。気を付ける」

「……………（コクン）」

デットゴーレムの攻撃を軽々避けるバーディア。さすがスピードを特化したモンスターだ。

「GOOOOOO!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「っ！？」

み、耳が…………こ、デットゴーレムコイツの咆哮のせいか…………っ。

「…………欲しい」

俺はその時、ワクワクでどうしようもなかった。だって、こんなヤツを仲間にしたら絶対に祥悟を倒せるんだからな。

「なあ、名前…教えてくれ」

「え？」

「これからコイツらを倒す。そのためには仲間の名前を知る必要がある。違うか？」

「……」

劔飛SIDE OUT

ロンSIDE

たく、劔飛のヤツどこにいったんだ？ 先に走っていったとたん急に姿を現さなくなっちまって…

「プレイボール…」

「っ！？」

弾丸が飛んできた…？ しかも、物凄い速さで…

「っ！誰だ？」

ギリギリで避けた。あ、危ねえ…

「……」

現われたのは女性。

何で女性がこんな危なっかしいところに…？

「あまり動かないで、狙いが定まらない」

「んのやろっ」

久々の強者だ。何が目的かは知らんが、俺の前に現われたのが運が悪いつてことを教えてやる。

「たああっ！」

横に大振りをするが、フツと下を見たら女性が待ち構えていた。チツ、躲すには距離が足らねえ。どうする…？

「これでゲームセット…」

どうする！否っ。

「跳ね返す！」

「え？」

女性が放った弾丸を見事跳ね返した。

……久々だ。こんなに燃えるのはっ！

「なあ、名前聞いてもいいか？」

「……？」

「俺の流儀はまず名前を聞いてから倒すんだ。っと、俺の名前はロ
ン・ハワード。よろしくな」

「瑠璃……水原瑠璃」

「そうかい。なら、遠慮なく行くよ!」

瑠璃が2丁のハンドガンをガンガンと放つ。だが、俺の大剣にやかなうはずない!

「せええええやあああ!!!!!!」

キング・リューザを上手く使って瑠璃のハンドガンから放たれる弾丸を避けるが……

「ぐあっ!」

な、何でだ? 確かに弾丸を避けたはずだが…

「瑠璃の弾丸は自分の思い通りに動かすことが出来る」

思い通りに、ねえ。

やるじゃん。俺もますます燃えてきたぜ! 絶対え倒す! そっと思い瑠璃に斬り掛かるが――

「遅い……」

「ガハッ!」

くっ…前衛と後衛じゃ差がありすぎるっ! どうすれば…

「瑠璃に勝てるはずない」

ハッ、言ってくれるじゃん。んなこと言われちゃ本気を出さなきゃいけないようだな。

見せてやるよ。俺の本気をつ！

「リミット解除“レベル3”」

バラバラになった仲間 劔飛&ロンSIDE（後書き）

さてさて、ひょんなことからバラバラになった仲間たち。一体どうなるのか…？

仲間と咲彩の秘密

「リミット解除“レベル3”」

そういうとロンは大剣を置いて、詠唱を唱え始める。すると、ロンの武器『キング・リューザ』が変化し始めた。その変化した大剣はかなりごつくなっていて、切れ味も良さそうである。

「……瑠璃に勝てるはずない」

「そりゃやってみないとわからないもんだ、ぜ！」

ロンが一振りをする、大地が割れ始める。地割れだ。大地を揺るがしといて、相手の隙を突く。

だが、それを読んでいたのか、瑠璃は石の上に移動する。

「暗殺は素早さが大事」

「でもよう、逃げてちゃ殺せねえぜ」

「……っ！」

気が付いたらすぐ後ろにいるロン。
そしてロンは大剣を振り上げ……

「ぬおおおおっ！……！！！」

瑠璃が「もうダメだ」と思ったとき、自分の体に斬られた感覚がないのに気が付く。なぜならロンは大剣を寸止めをしていたからだ。

瑠璃の頭にはハテナがあるみたいに呆然としている。それはそうだ。自分を殺そうとしているヤツを殺さないなんておかしい。だが、ロンは違う。殺さないんじゃないじゃなくて殺せないのだ。優しい心の持ち主のロンは殺すなんて到底無理。

「瑠璃が生きていればあなたを殺すかもしれない」

「なら俺は殺されないように生きる」

「瑠璃が死ねばあなたは幸せになれる」

「人が死んで幸せになれる人はいない」

暫し2人は黙り込んで10分が経過をしようとしていた。最初に声を上げたのは瑠璃だ。瑠璃が言った言葉は意外な言葉であった。

「瑠璃も……」

「？」

「瑠璃も生きていいの？」

「当たり前だろ？誰も拒まないさ」

「瑠璃も、ロンと一緒に生きたい。瑠璃を救ってくれた命の恩人と一緒に……」

「来いよ。俺らと一緒に来たら絶対エ面白エぞ」

「うん」

そして劔飛と綾子は…

「行つたよ劔飛君！」

「了解です、綾子さん」

デットゴーレムと死闘し続ける事早1時間。綾子と劔飛はデットゴーレムを追い詰めるようになった。

「バーディア、アイツの足下に向かってブレイクファイアッ！！！！！！」

炎の不死鳥になったバーディアはデットゴーレムの足へと飛んでいく。

それも素早い動きで。

それに追い付けないデットゴーレムは、よろけて転ぶ。それを見逃さない綾子はすかさずトライデントで攻撃。

「今よ！」

「おしっ！」

綾子の合図で劔飛は詠唱を唱え始める。

そしてデットゴーレムは魔法陣の中に吸い込まれる。成功だ。

「はあ、はあ……」

「お疲れ様」

「お疲れ様です。綾子さん」

ハイタッチをしてその場を去る2人。
場所は移って洞窟の地下。そこには1人の男性と女性が睨み合っている。

「そこを退いて貰えるかしら？」

「断る。俺はお前を倒す」

「何で私なのよ！」

「それはお前がここにいるからだ」

男性は咲彩に近づきそう言う。

「は、はあ？何言つて——」

咲彩が言い返そうとしたら男は斧を振り下ろす。
間一髪で避けた咲彩はアイシクルで男を斬り裂く、が。斬った感覚がない。フツと上を見ると男が斧を構えてニタ、と笑う。

「っ！」

急いで防ごうとする咲彩。防いだはいいが、男の一撃がスゴく重い。

「お、重い……」

「ハッ！」

さらに力を入れるとまた重くなる。

それに耐えきれなくなった咲彩は左に回避して攻撃を流す。

「やるじゃん」

「ありがと。でも私、急いでいるからアンタの相手をしてるヒマはないの」

「言っただろう？お前にはなくても俺にはある」

「……そう、なら仕方ないわね」

お互い再び武器を構えまたギリギリと睨み合う。
最初に動いたのは咲彩だ。

「ハアッ！セイツ！」

斬り上げ、落ちてきたところを横に溜め斬り。

「ぐうつ……！」

男の武器 断頭斧でなんとか防ぐ。

「……アンタ、名前は？」

「俺ア尋^{あかねじこ}。赤根尋^{あかねじこ}ってんだ。お前は？」

「私は星菜咲彩」

「そうか。まあ、どうでもいい。とりあえずお前をぶっ飛ばす！」

そして場所は変わって洞窟出口付近。ここも男と男が火花を散らしている。

「てやああああっ！……！！！」

「はああっ！……！！！」

ハンマーと槍がぶつかり、金属音が洞窟内を響かせる。

ハンマーと槍…素早いのは槍の方だ。だが、攻撃・防御とくればハンマーの方が有利。

「……」

無言で槍を突きまくる男とそれをハンマーで必死に防ぐ鍊斗。

「くっ、速エ…まるで矛先が見えねえ」

「トドメ！」

最後の渾身の突き。結果は……

「あつぶねえ……」

ハンマーで防ぎ、何とか身を守った鍊斗。

その後鍊斗は男との勝負に勝って、ある事言っ。

「俺の名前は吾神鍊斗。お前は？」

「名前なんて聞いて——」

「俺とお前は戦った。そして友達になった」

「ち、ちよっ！どついう理屈だ！」

鍊斗はなぜこのようなことを言ったのか。

それは鍊斗の頭の中では『ケンカ＝友達』という風になっているからだ。

鍊斗はバトルワールドに来る前はケンカ好きの不良なので、この考えが正しいと思っている。

「たく、友達って言われても何すりゃ……」

「俺らの仲間になる。ただそれだけだ」

「友達……」

ニコリと笑う鍊斗に対して男は少し間をあけてから「おう」と二言で返した。

そして場所は戻って咲彩と尋。

数分間2人は激しい防功をしている。攻めたり防いだりの繰り返しだ。

「はあ……はあ……アンタ、そろそろくたばれば？」

「冗談。諦めるのはお前だ」

「嫌よ。私は……アンタを倒して………劔飛と……」

「ふん、スパイのくせに何を」

「っ!？ 何でそれを知ってるのよ!」

暴走

「何で……私の目的を……？」

「バレバレだつつつの。単にアイツらが鈍感なだけだ」

そんな……私の計画が……

…殺す。あの男を殺してやる！！！！！！

「お前の狙いは天月劔飛の首を刎ねること。違うか？」

「……いいわ。アンタを殺してこれをなかったことにする」

「やれるもんならやってみろ。俺はそう簡単にいかない」

「はあああああ……！！」

「うおおおお……！！！！！！」

ガキンと金属音が響き、交戦が始まる。
こいつは殺して……

殺して……

そして……

劔飛を殺す！

「いい殺気だ。だが、まだまだ」

高くジャンプして斧を振り上げる。よし、避けれるスピードだ。

「そこっ！」

「がっ」

い、いつの間に後ろに……？

確かに相手は上に居たはず。なのに何で後ろに……
フ、フフッ……

「アハハハハハ」

「ようやく本性を現わしやがったな」

「いいワ、あなたも殺シて劔飛も殺ス」

咲彩SIDE OUT

尋SIDE

な、何だこの悪寒は……！ とてつもなく邪悪なオーラだ。先ほどの殺気より凄まじい。

しかも身体から赤い線がいくつも入ってる。これは覚醒か？ いや、それにしても身体に変化しすぎている。これは暴走だ。

早くなんとかしないとコイツは……

そう思っていると、後ろから熱気を漂わせているのに気が付く。その正体とは……

「バーディア、あまり大きすぎると咲彩にも被害が加わる。少し抑えて」

「クキュー」

天月劔飛……何でこんなところに……？

「話は後だ。今は咲彩の暴走を止めるのが優先だ」

「お、おう」

そうだ。今はコイツの暴走を止めるのが最優先だ。とやかく考える暇はない。つつても、コイツが欲しいのは天月劔飛の首。天月劔飛を危険に曝すのはあまりにもひどい話だ。

「ま、先にコイツの暴走を止めないと話が進まないな。ハッ！」

断頭斧で真上から切り裂く、が。星葉咲彩は自分の大剣で防ぐ。なるほど、一筋縄じゃないか。それに、少しだがパワーも下がり始めている。いけるかもしれないな。

「劔飛君っ！」

「綾子さん！？」

そう名前を呼ぶものは海賊服を着た女性。その女性はトライデントを持っていて、なぜか俺を見ている。うーむ、彼女に何かしたかな？ 記憶に無い。

まあ、考えるのは後にしよう。それより……

「ウウツ……」

まだ治まらないとなると、手段は1つしかない。星菜咲彩を倒す。それを天月劔飛達にも伝えるが、「仲間だから倒せねえ」と言ってこの方法を拒否した。ま、そりゃそうか、天月劔飛と星菜咲彩はパートナー。仲間を失いたくない気持ちも分かる、が。今のアイツは何を言ってもどうしようもない。助かる方法はあるが、確率的に低い。どうする……？

「どうするもなにも、俺は咲彩を助けだす」

「無理だ！ 助かる方法はあるが、確立が低すぎる！」

「でも、あるんだろ？」

「……」

言うべきか？ いや、言わなくちゃならないな。

「それは――」

言い掛けたとき、星菜咲彩の大剣が目の前に来る。チッ。

「岩の主よ。我の命により汝はここに召喚とす。デッドゴーレム！」

デッドゴーレム……？ あのデッドゴーレムを仲間にしたのか？
あのデッドゴーレムを仲間にするにはかなりのMPが必要のはず。
それをこの男は……

「デッドゴーレム、あまり力を入れるな」

「GOOOO!!!!!!!!!!」

今度は天月劔飛に攻撃してくる。こうなった以上誰にでも攻撃してくる。

「避ける！」

「やだね」

「なっ……！」

「あいつは今悲しんです。気が済むまで殴らせてやる」

「んなこと言ってる場合じゃない！ 早く避けないと死んじゃう！」

「死ぬ？ 上等。俺はサモナーである前に1人の男だ。女性1人が苦しんでいるのに見捨てられるか」

コイツ、俺らが不利なのに……

「あゝ、劔飛君弱いくせに生意気」

「な、なんだとっ!？」

全く、バカというか何というか。ま、多分そんなバカだからこそ惹かれたんだろう。

「さて、反撃をしないとな」

断頭斧『パニッシャー』を地面に置いてある詠唱を唱える。一応初心者用の詠唱覚えてよかったよ。

「何してんの？」

「睡眠魔法の詠唱だ。コイツを一時的に眠らせて夢のなかへ突入する」

「そ、そんなこともできるの？」

「ああ、だが、眠らす時間は少ないがな」

「でも、もし誰かがあの娘の夢のなかにいたらどうなるの？」

「死ぬな」

「そんな……」

「その時が来たらまた眠らせる」

そう、なかに入るのは2人。つまり天月劔飛とあの女だ。

「私も残るよ」

「な、何言ってるんだ！」

「あなたは魔法に集中して」

なかに入るのは天月劔飛だけ……って言うことか。

「天月劔飛！ 聞いてたか？」

「もちろん！」

「よし、展開するぞ！」

天月劔飛……頼むぞ。

暴走（後書き）

さてさて、今日は覚醒と暴走について説明していききたいと思います。

暴走……覚醒を一定以上到達すると暴走する。

止める方法は倒すか眠らせ夢のなかへ行って魔夢を倒す。

覚醒……成功すると全ての能力が上がるが、失敗すると上記のようになる。

サーヤの過去（前書き）

今回は謎だらけの咲彩の過去です。

サーヤの過去

さて、咲彩の夢の中に入ったんだが……なんかスゴいことになってるな。一言で表すなら少しファンタジックだ。俺の予想とは違う。そして俺は無数のドアがあることに気が付く。この扉って一体……

『こりゃあ星菜咲彩の記憶だな』

突然頭に流れる声。しかも聞き覚えがある。つーか、咲彩の記憶って……

『言葉どおりだ。だが、あまり探索してやんな。プライバシーっちゃうのがあるからな』

「あ、ああ」

少し歩くと『オーディション』と書かれたドアがある。どういう意味だ？

心臓がバクバクする中ドアを開く。刹那、光が俺を包み込み、ある記憶を映し出す。それは幼い頃の咲彩であった。何が何だかわからないが、見てみることにした。

『ううゝ……緊張するよおゝ……』

『大丈夫、咲彩なら出来るわ』

『うん！』

どうやら何かのオーディション会場らしい。そして咲彩を慰めてい

るのは母親か？ 何か優しそうな母親だな。ん？ あそこにいるのは母さん？ 何でこんなところに………待てよ？ 小さい頃うちの母さんはどこかに出かけてくるって言って確か……

『杏』

『昌子！ 来てくれたのね？』

昌子とは俺の母親、そして杏とは恐らく咲彩の母親のことだろう。でも、母さんの様子が変だ。何か暗いような……

『杏………』

『んー？』

『死んで』

『えっ？』

ぐさりと生々しい音が聞こえる。ちよっ………母さん何して――

……あの時か………母さんが突然いなくなったのは………

母さんは咲彩の母親を殺し逃走。なんつう親だ。いや、そうじゃないな。咲彩はさぞかし俺を恨んでいるだろう。

「俺は母さんの代わりに罪を償う。それが最善」

『バカ考えてるんじゃない！ お前が死んだところであいつは救われない』

「じゃあ……俺にどうしろと？」

『…………』

「あいつは俺に恨んでる。なら、あいつが望むことをしてやるのが——」

『——お前、何であいつがお前の仲間になったか知ってるか？』

仲間……どうせ俺を殺そうとしたんだろう。だから俺に近づくようにと……

『昔はな。だが、今の彼女の考えは違う』

「それはどんな風に？」

「さあな」

そうか、あまり気にしすぎないって事か。

俺はとりあえず進むことにした。

少し歩くと光が見える。やっと出口か。何かスゴいものを見ちゃったから気が進まない。

「あらあら？」

後ろを見るとお嬢様っぽい格好をした女の子が俺に近づいてくる。何だ？ 彼女の後ろに黒いものが……

「何モンだ！」

ここに入れる者は俺しかないはず……なぜ見知らぬコイツがつ！

「私は宇鍊^{うねり} 刀香^{トウカ}。ただただ強者を求める者ですわ」

ま、マズイっ！ この殺気は只者じゃない！ 足が……震え……て

……

「ザコには用はありませんわ」

スツと俺の前を通り過ぎる。び、ビビった……

でも、何だったんだろ。ザコには用はないって言ってたけど、何かあるのか？ いや、あまり深く考えないほうがいいな。それに、戻ったら咲彩に何て言うか……

『天月劔飛、そろそろ戻ったほうがいい』

「え？ でも、咲彩の中の魔夢を倒さなきゃいけないんだろ？」

『もう解決した。早く帰ってこい』

「あ、ああ」

意識を無にする。すると、目を開けるとそれは見に覚えがある場所。良かった、元の場所に帰って。

「あ、そつだ。咲彩は！？」

「まだ寝てるわよ」

「そつか……」

良かった。

しかし、いきなり解決したって……やっぱりあの宇鍊ってヤツが関係しているのかも。あの殺気は尋常じゃない。またいずれ俺らの前に来だろ。それまでには力をもっと付けなくちゃな。

「頑張れ、劔飛君！」

「ちよつ、頭をクシャクシャするのやめてください！」

「むう、何よもう」

今現在ここにいるのは俺と咲彩、ロンと鍊斗さんはどこにいるんだ？ 早く見つけださないと先に進まねえ。

「お、いたいた」

「やっと劔飛達に会えた」

その声は……鍊斗さん！ ロン！……達の後ろにいるのは誰だ？

「……誰？」

「俺の仲間、天月劔飛と星菜咲彩。時に劔飛」

「ん？」

「その美しい女性は誰だ！」

「ロン……こつちに来て、ちよつとお話が……」

「あつ、ちよつ、あーーーー！！！！！」

あ、どっか行つた。まあ、じきに戻ってくるだろ。生きていれば……

「何だ何だ、結構賑やかになってるじゃねえか」

「あまりうるさいのは好きじゃない」

「ま、そうカッ力するなや」

鍊斗さんともう1人のがこちらにくる。誰だ？　なんかスゲー仲良さそうな感じがするけど。

1時間後、ロンは無事に帰ってきた。良かった、死んでなかった。あの女性からの視線は、死を招きそうな感じがしたから心配した。

「さて、みんな戻ってきたから自己紹介をしようか」

1人の男。そついや名前知らなかったな。

「俺の名前は赤根あかね 尋ヒロ。死刑執行人だ」

「水原みずはら 瑠璃ルリ……暗殺者アサシンと射撃手スナイパー」

「私は志木しぎ 綾子アヤコよ。職業は海賊バイレーツ。よろしく！」

「伊達だて 魁吏カイリ、槍兵ランサーだ」

それぞれ自己紹介をし、俺らもする。そして早速ある話をする。そ

れは綾子さん達が仲間になるのか。

綾子さんは仲間になるとか言ってたけど、他の人はどうなるんだ？
もし、仲間になってくれるならどんなに心強いことか。

「瑠璃はいつでもロンと一緒に」

「おいコラ！ 離れろ！」

仲が良いものだ。

「私も劔飛君が心配だし」

そう言つて俺の頭をクシャクシャする。ホントに俺の頭好きなんだ
よね。綾子さん。つか、俺が心配つてアンタは俺の母親か！ 2
4歳でしょ！

「俺なら仲間になる」

「俺もだ」

お、まさかこの2人が仲間になってくれるなんて。こんなにも心強い
ことはない。

「あ、そうそう劔飛君。この先は船を出す必要があるんだけど……
私たちの船使う？」

「え？ でもそれってミズナ村に着かないんじゃない……」

咲彩の言つとおり、ミズナ村はこの洞窟を抜けて少し歩いたら着く。
そう聞いた。いや、そうじゃなかったらこの地図は一体何のために

あるのか。

「んー、じゃあその地図がもし、足止め用だったら？」

その言葉に皆は固まる。そうだとしてみんなで？ なぜそんなことを？ まるでここから出ないようにしていいみたいだ。

「とりあえず私たちの船に移動よ。話はそれから」

こうして俺らは4人も仲間にした。これからどうなっていくやら。

サーヤの過去（後書き）

何か質問や感想が書いてください。

呪いと魔導士と錬金術師

綾子さんの船に乗ってから10時間。やっと、ミズナ村が見えてきた。結構長い道程だったな。でも、ここがゴールじゃない。

「ねえ、劔飛」

咲彩に呼ばれ、船のデッキへ出る。用はやっぱりあの過去のことか？ いや、咲彩は俺があゝの過去を見ていたのを知らない。なら何の話？

「アンタさ、私の過去見たでしょ」

ビンゴ！ じゃなくて、何故そのことを知っているんだ。誰かが話したのか。

「尋から聞いたわ。私を助けるために私の過去を見た。そして、私はアンタを――」

「ストップ」

咲彩の表情が暗い。俺は本来見てはいけないものを見てしまっている。まず俺から謝るのが道理だ。

「すまない！」

俺の謝りに目がキョトンとする咲彩。どんなに思っていようと知ったこっちゃない。今の俺には謝ることしかない。それが今俺の一番の出来ることだ。

「え？　ちよつ、何で劔飛が謝ってんのよ！　謝るのはまず私からよ」

そう言つて頭を下げる。

「ごめんなさい。私が寝ている間、夢の中でお母さんに会つたの。それでね、お母さんがこう言つたの『私は悔やんではないわ、だから劔飛君に復讐するのは止めなさい』。それで分かつたのは、復讐は復讐を生むだけ、何も解決してはいない。そう思うと、何だか自分がやっていることがバカらしくて……」

咲彩……

「でも、これでスッキリした。ありがとね」

その時の咲彩は涙ぐんでいた。俺の母親が咲彩の母親を殺した事には変わりない。せめて何か償わせてもらわないと俺の気が進まない。咲彩に頼んでみると、意外な台詞が返ってくる。

「ずっと……私の傍にいなさい」

少し恥じらいながら言う咲彩に不覚にもドキッとしてしまう。

「咲彩……」

ずっと……咲彩は1人ぼっちだったんだ。

そして俺も1人ぼっち。

多分、俺らは誰かに甘えたりしたかった。なら、俺が居よう。そうすれば咲彩も俺も1人じゃなくなるし。

「分かった。ずっと一緒にいる」

どこまでも、な。

「着いたわよ。ここがミズナ村」

船のイカリを降ろし、ミズナ村に入ろうとした瞬間。何者かが仁王立ちをしている。コイツは一体……

「ここは神聖なる場所。ここに入るとは許さん！」

槍も持っているし、ここを守るものかな。槍には遠距離だ。

「バーディ——」

「俺がやる」

俺がバーディアを喚ぶ前に魁吏が一步前へ出る。そうか、やっぱり槍使いには槍使いのスゴさがわかるのか。

「じゃ、俺が立会人になろう」

鍊斗さんが手を挙げる。俺らが見届け人ってことか。

「両者前へ………始め！」

最初に動いたのは魁吏だ。
魁吏は槍の矛先を上に向け構える。

「仙竜……」

静かに前かがみの態勢にする。

「疾晃！」

そして、風のごとくに相手に刺す。しかし、相手は高くジャンプして躲す。それは俺に見えないくらいに素早く。

「そんな……俺の攻撃が躲されるなんて……」

「蒸真深裂！」

上から下へと突く。敵ながらあっぱれだが、魁吏はその上のスピードを上回る。

「心臓必中。爆閥針！！！」

出た！ 魁吏の能力 心臓必中。その能力を使ったら必ず心臓を貫ける。1日2回つてのは玉に瑕だが、これに勝るものはいない。

「やつ……べえ……」

運良くも相手は空中。空中では身動きはとれないはずだ。

「うおおおお！！！！！」

相手の槍は弾かれて、その相手は……

「はぁ……はぁ……」

ギリギリ避けたみたいだ。

「勝者、伊達魁吏」

相手は動けない状態。よってこの勝負は魁吏の勝ちで。

「スミマセンでしたあー！」

ここは海賊や盗賊に襲われる事が多いので、勘違いのようだ。しかも土下座って、公共の場でよく恥ずかしくないよな。

「それより——」

「あ、名前は時原ときはら 成ナルッス！」

名前じゃねえよ。と、みんな心の中で思っているはず。

「名前じゃなくて、ここについて教えてほしいんだけど」

魁吏に言われ、渋々話す。

「さっきも言いましたけど、ここは海賊・盗賊に狙われやすい場所です。何故狙われるようになったのかは、少し意味不明なんス。『8000年前にある呪いを仕掛けた。その呪いを解きたければ錬金術師を呼んで解け』と言い伝えではこうなってます」

「錬金術師？ 何で錬金術師？」

成の説明に鍊斗さんが反応する。そりゃそうだろう、鍊金術師なんてそこら辺にいるだろうし、大体呪いを解くのに何で鍊金術師……そうか、だからか。

「なあ、何か分かったのか？」

尋の問いに俺は説明するように答える。

「鍊金術師……つまり、呪いを掻き消すための武器を作れてことだ」

「なら、魔導士と協力すれば？」

「綾子さん、俺らのパーティに魔導士はいないよ。確かに、魔導士と協力すればより最強の武器を作れるかもしれないが、運悪くこのパーティには魔法系統がない」

「んで、どうするんだ？ 鍊斗だけじゃキツいんだろ？ なら探しやすいじゃん」

「ロン、簡単に言うがこの世界は広い。ましてや魔法系統と言う範囲は小さすぎる」

鍊斗さんの言うとおり、俺はこの世界に来たばかりだが、長年この世界にいる鍊斗さんの意見を尊重したほうが得策かもしれない。でも、このままにしてはいられないし……

「皆さん、何してるんですか？」

ピヨコンと小さい顔を出す。誰？

呪いと魔導士と錬金術師（後書き）

さてさて始まりました新章 ミズナ村の呪い編

彼女は一体誰なのか……？

白い霧

どうみても小学生じゃん！　ロリじゃん！　いや、別にロリを否定したわけじゃないよ！　ただ……

「何で１８のくせに身長が小学生の平均しかないの！」

色々ツツコミたいけど、俺の体力が減るから止めよう。

「それより、コイツが本当に魔導士なのか？　何か信じがたいな」

それは俺も思う。まず詠唱が唱えられるかつてのが次の疑問。囁んだりしないだろうか？　何て考えが何度も何度も頭を往復する。てか、それしか考えられん。

少女……いや、彼女は今にも泣きそうな顔で俺らを睨んでいる。心配すぎる。

「と、とりあえず村長に話をしようぜ」

ロンの言うとおり、俺らは呪いをのが最優先だ。

「皆さん、よくぞ来てくれました」

案内されたのは村長の家、ってか家デカイ。盗賊や海賊に襲われるのが納得だ。

「一体、何があったんですか？」

綾子さんが村長に聞く。すると、村長は黙ったままある方向に指を指す。その場所はこのミズナ村で一番高いと言う木、モール大樹。あの場所から呪いを放っているのか。

「行ってみる」

おおっ、ここに来て水原が初めて喋った。ホントに無口無表情だな。

「尋、ちょっと確かめたいことがあるんだけど」

「ん？」

魁吏が尋を呼んで、尋は魁吏の耳に口を当てる。内緒話だろうか？

「も、もしかして尋って魁吏のこと……」

それはない。

あの事件以来咲彩は結構ジョーダンを言うようになった。ツッコミ役が俺だけになったのは悲しいけど、咲彩が笑顔を取り戻せたからよししよう。

歩いてから約50分、何やら白い霧が出てきた。こりゃ前が見えないな。皆とはぐれる前に戻ったほうが良さそうだ。

「皆、一旦引き返——」

後ろを振り向くと皆がいない。くっ、遅かったか。

「劔飛！」

俺を呼ぶ声がした。その声の正体は咲彩だ。良かった、とはいえない。その良かったは皆と合流して初めて言える言葉だ。咲彩だけ見つかったても安心は出来ない。

「劔飛、何か近づいてくるよ」

耳を傾けて良く耳を澄ます。ザッ、ザッ、と俺らの方に近づくのが分かる。

人だ、人がこちらに向かってくる。やべえ、何だこの殺気は……っ！ 大地が震えている。

いや、殺気じゃない、魔力だ。強大な魔力がこっちに来る。

「来るわよ、劔飛」

「ああ」

咲彩はアイシクルを抜き、俺はデットゴーレムを召喚する。

「咲彩、お前は必ず俺が守る」

「全く、劔飛のくせに生意気言っちゃって……私はアンタの背中を守る。アンタは私の背中を守る。いいわね？」

「問題ない！」

劔飛 SIDE OUT

ロンスIDE

……ここはどこだ？ 劔飛達の姿が見えない。はぐれたか。

「瑠璃たち……迷子になった」

「だよな……ってうおっ?!」

い、いつの間に瑠璃が……

気配を消して俺の後ろに立たないでくれよ。心臓に悪い。

「っ！ 敵……」

こんな時に限って敵が出てくるんだよなあ。こういうのはフラグって言うのか？

「敵を抹殺。それが俺の使命」

後ろ!?

「つと」

ギリギリで矢を見切り、キングでガード。間一髪、しかも矢の先に毒が盛られていた。危ない、なぜこんなことをするのか……

「誰だか知らないが、俺を怒らすたあいい度胸だな」

「瑠璃のロンに……触らないで……っ！」

すかさずハンドガンで射撃。瑠璃の愛用のコルト・ガバメントが。弾丸の速度が速いと聞く。

「そんなものか。究極^{アルティメット・スナイパー}の狙撃手」

！？ 瑠璃の攻撃が……当たらない……？

「俺の名前は獄条^{じくじょう} 槇^{マキ}、お前を倒しに来た。水原瑠璃！」

どういうことだ？ このいかついヤツと瑠璃が……知り合い……？

ロンSIDE OUT

錬斗SIDE

「おい。劔飛、咲彩、ローン」

どこ行っただよアイツら。他のヤツらもないし、しかも……

「何で俺がガキと探さなきゃならんだ！」

「むう、ガキではないです！ 陽花です！」

散々だよ全く。ん？ 何かの視線感じるな。何だろ、とても邪悪な
感じの……

「誰だか知らねえが、姿を現せ」

「おや？ お気付きでしたか？」

俺の影から出てきたのは1人の女性。コイツ、いつから俺の影につ

！　もしかして、最初から……？

「気付かないのも無理はありませんわ。わたくしに気付くものは、あの4人ですもの」

4人？　どういう意味だ？　全く訳が分からない。

「もしかして、天月君やハワード君達のところにもいるですか！？」

「お子様なのによく分かりましたわね」

「陽花はお子様じゃないですー！」

そう言うと、右手に何やらペンみたいのを取り出した。

「陽花は魔導士でも、書いたものを具現化出来るのです！」

ええ！？　ズルツ！　そして無い胸で張るな！

でも、これなら呪いを解くことが出来るかもしれない。

「行くですよー、行け、幻獣　ユルルングル」

うおおー、デカイ。何だコイツは……

「罪人を飲み込む虹蛇。ユルルングルです」

何か頼もしいな。

「行けーですー！」

ガブツとユルルングルが女性を食らい付く。だが、ユルルングルの腹からどんどん削れていく。まさかコイツ……

「そんなもんですの？」

効いてない……嘘だろ……

「そ、そんな……あ……」

錬斗SIDE OUT

尋SIDE

「ハア、ハア」

コイツ、何で攻撃をしても効かないんだ。

「ガーディアン守護者。これが俺様の職業だ」

なるほど、防御が取り柄の職業か。
おもしろい。

「ちよつ、尋君何笑って……」

「さあ！ 勝負だ！」

綾子さんが何か言っているが気にしない。俺はコイツをぶん殴る。

「ほう、俺様に楯突くたあいい根性してるじゃねえか」

倒す。俺たちに手を出すと痛い目に逢うってことを教えてやる。

「来い！」

「うおおおお……！」

尋SIDE OUT

白い霧（後書き）

これで2回目ですよ、皆がバラバラになるネタ。

でもこれで仲間になるってのはありえませんが、はい。

では、感想待ってます。

槍使いの友情（前書き）

今回は前回出しそびれたあの2人。

槍使いの友情

「いってえ……ここどこだよ」

確か俺は皆さんと一緒に歩いて……そんなもって落し穴みたいのに落ちて……

「あつ、魁吏さん！ 起きてください！」

「ん……ん……ここは……？」

「どうやら罠に嵌められたっぽいです」

でもここってどこだ？ 下に落ちたのは分かっているが、こんな場所……

「ん、なんかおかしいんだよねえ」

魁吏さんが悩んでる。おかしい？ 俺にはイマイチ状況が読めない。

「だっておかしくない？ 何でわざわざ俺と成ツチだけ下に落とされたのか。もし、俺の予想が正しければ、俺らはアイツらの中で弱いつて扱いになっている」

俺らが弱い、か。そんなことない！ 俺はともかく、魁吏さんはものすごく強い人だ。許せない、やっとな俺の尊敬する人を見つけたのにつ！

「探しましょう。魁吏さん」

「探すって言ったって……今の俺らはここを動かないほうがいい。あまりヘタに動くと面倒なことになりかねない。劔飛達が俺らを見つけるまで待とう」

「魁吏さんは……黙って見てろって言っんですか？」

「そうじゃない。ここがもし敵のアジト内だったら騒ぎになる。そうなったら劔飛達も来に來れなくなる。分かるか？ その意味」

そんな……俺は……

「敵を倒す！」

「ちょっ、待て！」

魁吏さんが何か言ってる。今の俺は全く聞こえないだろう。怒りで……失望で……俺は無意識に奥の方へ進んでいった。

魁吏さんは分かってない。俺がどれだけ魁吏さんや皆さんのことを考えて――

「くそっ！」

八つ当たりで壁を殴る、殴る、殴る。何回も壁を殴った。戻ろうかな、そう思ったときに何か氣弾のようなものが飛んでくるのに氣が付く。

「誰だ！」

「侵入者発見、直ちに排除せよ」

ロボット？ なぜこんなところに……？

「排除せよ！」

「うおっ」

み、ミサイル？ おいおい、どこの秘密兵器だよ。てか、学校で非核三原則って言うのを習わなかったのか？ って言う俺も銃を持ってるんだけどね。

「避けなかったら……危ないだろ……！」

銃で貫く！

「ビビッ、ビ……排……除……」

「どうだ！ これでお前の負け——」

「排除！」

なっ、もう1体……？ いや、コイツだけじゃない。後ろに何十体かいる。

「くっそおおっ……！！」

大群の中に無理矢理突っ込む。突いて、突いて、突いて、突いて。そしてぶち貫く！

「たあああああ！……！！！」

何体倒しただろう。結構倒したのは分かるがなかなか減らない。き、キリがない！

ハア、ハア、ミスったなあ。これで俺の人生が終わりか。もう、体が動かない。くっそ……
そのまま俺は目を閉じた。

フワフワする。ここは一体……

それに、何か暖かい……スゲー気持ちいい……
そっか、俺は天国に来たんだ。

「ん、ん……」

「気が付いたか」

「あれ？ 魁吏さん？」

俺は魁吏さんにおぶさっている。

確か俺は天国に……でも何で魁吏さんがいるんだ？

「あまり無茶すんなよ。あの大群を1人で倒すの大変だったんだぞ？」

俺はなんて奴なんだ。勝手に1人で動き、そして魁吏さんに迷惑させているなんて……

「すみません、俺——」

「何も言つな。俺もお前の意見を聞けばよかったって今も思っている」

「魁吏さん……」

「さ、まずはここを出るぞ」

「はい！」

成SIDE OUT

劔飛SIDE

「我は暗黒の槍使いなり、会心の一撃受けてみよ！」

黒い槍？　なんて邪悪なオーラを纏っているんだ。

「燃えろ」

「キャアアアア……！！！」

黒い炎が咲彩に向かう。マズい、防御が間に合わない！

「咲彩！」

コイツ強え、今まで戦ってきた中でかなりの実力だ。世の中にはんなバケモンみたいな奴が一杯いるのかよ。

「どうした裏切り者。貴様の怨みは簡単に消えてしまったのか？」

……え？ 裏切り者？ どういうことだ？

「咲彩、どういふつもりだよ」

「あの男の言うとおりよ。私はあの男の配下だった。そして、あなたを倒そうとした。それは紛れもない事実よ」

咲彩が俺を殺そうとしているのは知っている。でも、コイツの下にいたなんて……

「でもね、私は誓ったの。聖騎士として……1人の女として劔飛を守って！ だからあなたの下にはもうならない。あなたを倒す！」

「いい度胸だ。来い」

クイクイと人差し指で挑発をする。

咲彩が戦っているのにどうして俺は後ろで指を食わえジツと見ている！俺が弱いからか？ そうだ。弱いから皆に迷惑を掛けてしま

う。

「俺は弱い」

劔飛SIDE OUT

魁吏SIDE

ん、ここはどこだ？ どうやら俺らは迷い込んだみたいだ。

あ、上から落ちてきたから上に上ればいいのか。でもどっから上るのかな。

「魁吏さん、あそこに蔦がありますよ！ 上れます！」

案外早く解決した。こういうのは謎解き！ ってな感じで解いていくのが楽しいんじゃないか。

「魁吏さん、これ、いつまで上るんでしょうね？」

「さあ？」

確かに、上っても上っても地上には着かない。もしかしたら一気にモール大樹の一番上に到着か？ それならどんなにいいことか。なんて考えてたら光が見えた。もしかすると……

「何だよ……ここ……」

そう、モール大樹に着いたが、大樹の中がスゴいことになっていた。それは中が近代の機械化になっていたのだ。確かモール大樹って、古代からあるモノって村長が話していた。

「魁吏さん、どう思います？」

「どうって……止めるしかないだろう」

「ですよー」

考える、必死に考えるんだ。

「成、下に降りて劔飛達に報告するぞ」

「了解ッス」

槍使いの友情（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
クライマックスに見えますがクライマックスではありません。まだ
まだ続きます。

信じる力

力が欲しい、だけど俺には無理だ。召喚師だからだ。皆の補助が好きだから……皆の役に立ちたいから召喚師を選んだ。でもそれはただの勘違い。ホントの召喚師は皆の補助だけじゃなく、自分の力だけで乗り切るものなんだ。だから俺には無理だ。

「ぐあっ!!」

「劔飛！」

「諦めるのだ。貴様らには勝てぬ」

ちつきしょう……やっぱり無理か。

「私は……諦めない……」

傷だらけで立ち上がろうとする咲彩。無茶だ。俺らがこんな奴に適うはず……

「諦めない！ 何があろうと私は……諦めない！ そうでしょ？
劔飛」

咲彩が……咲彩が頑張ってた。女の咲彩が頑張ってた。男の俺が頑張らないでどうする。

「そつだな……一丁頑張りますか!!」

劔飛SIDE OUT

ロンスIDE

「瑠璃、コイツと知り合いなのか？」

「……ただの敵」

ただの敵？　なら何でアイツは瑠璃に恨んで……？

「何だよ。コイツのこと全く知らないのか？　コイツはなあ——」

「ッ！」

敵が喋る前に瑠璃は相手の顔面めがけて射撃。

おい、どういふことなんだ？　俺にはさっぱり理解が出来ん。

「……そんなに言われたくないか？　水原」

「な、何がだよ」

「ダメ！　聞いちゃダメ！」

……瑠璃が声を荒げるなんて……一体何があつたんだよ。

「クヒヒ、いい機会だ。これを期にお前の人生をズタボロにしてやるよ」

「止めて！」

「コイツはなあ、この世界に来る前――」

「いやぁー……！！！！」

銃を乱射。でも当たらない。瑠璃がハズレるなんて……いや、瑠璃が動揺してるんだ。

「鳩村総理を殺した張本人だ」

「なっ！？」

新聞で見たことある。確か、5年前に鳩村総理宅で鳩村総理の遺体を発見した、そういう記事だった。そして、犯人は逃走中でまだ見つかってない。

「……瑠璃、ホントか？」

コクンと涙目で小さく頷く。そうか、あの事件の犯人は瑠璃……だったのか。

「クヒヒヒ、こりゃ傑作だ」

腹を抱えて笑う。でも、今はフツの女の子としてここにいる。

「でも、ここにいるのはフツの女の子の水原瑠璃だ」

「はあ？ バカじゃねえの？ てめえは騙されているんだよ」

騙されている、か。

「でもよ、昔は昔、今は今だ。俺は瑠璃を信じる」

そう、信じる。男が女を守るのはそうだ。だよな、“親父”。

「ロン……」

「ぐぬぬ……」

「さ、早く決めようぜ」

「うん」

「てめえらに何ができる」

「バカはお前だ。お前は1人、俺らは2人。勝負はもう決まっている」

ごくりと唾を飲む。緊張だ。正直、この男に勝つ方法なんてあるのか？ そんな疑問を抱いてしまう。でも、その疑問をすぐ消えてしまふ。その理由は瑠璃が俺の手を繋いでくれたのだ。そうだ。俺は1人じゃない。瑠璃が、劔飛がいる。

「……これは……？」

瑠璃が何かに気付いた。それは瑠璃と俺の武器だ。姿形が変わって、しかもそこから魔力が集中して集まっている。武器に魔力が集まるなんてありえるのか？ 否、現実には起こっている。信じるしかない。

「……てめえ、何した」

「瑠璃とロンの愛の結晶」

愛の結晶って……でも、これでイけるかもしれない。今の俺らは誰にも負ける気がしない。そういや、名前決めてなかったな。この剣の名前は王の大剣だ。^{キングカリバー}その名も通り、王のようにドデカイ大剣。

「瑠璃の武器は……蒼い薔薇」
^{ブルーローズ}

蒼い薔薇……フツ、いい名前だ。瑠璃は早速蒼い薔薇^{ブルーローズ}を使う。

「EM ストレート！」
^{エボリューションマジック}

真っ直ぐ伸びる弾。スゲー、俺も負けちゃいないな。

「パワードショック！」

ザン、ザンと2回斬撃を放つ。敵はそれを受けとめ地面へ落とす。だがそれで背中が丸出した。このチャンス逃すまいと、瑠璃はすかさず後ろに回り、ブルーローズで射撃。瑠璃のあの一言でこの戦いは終わった。

「ゲームセット」

「くっ……」

終わった。俺と瑠璃とあの男との戦いは終わったのだ。次は劔飛達を捜し出さなくちゃな。でも、一体どこに行けばいいんだ？ 辺りを見回していると瑠璃が何かに気付く。それはさっきまでなかったデカイ木。恐らくモール大樹だろう。なぜ、とは思えない。大体予想はつく。あの男を倒したら突然大樹が現したと言うことは、

何らかの幻覚を見た、否、見せられていた。つてことは他の奴らも同じようなことになるだろう。尋も綾子も鍊斗も陽花も、そして…
…劔飛も咲彩も。今もみんな幻覚を見せられている。なら、こんなところで休んでいる暇はない。早く操っている主を探さなくちゃ。

「主を探そう」

「……うん」

ロンスIDE OUT

鍊斗SIDE

「どうしたんですの？ これで終わりとはいいいませんよね？」

俺の攻撃が当たらない……？　んなバカな、アイツの動きが早いとはいえ、擦りもしないなんて……対処法が見当たらない。必死で頭の回転を速めるが、結局見つからない。ここで俺らが負けるのかよ。アイツとの約束……果せねえじゃねえか。

「執筆魔法　散雷！」
さんらい

筆に魔力を集中させて、空中に【雷】と言う字を無数に書く。パンと手を叩いたら、相手に雷が集中攻撃。うし！　これなら逃げられない、ナイスだ紫。

俺が内心で喜んでいるとシュンと何かが俺の頬を擦った。そんな…
…あの落雷を受けて平然としてる奴なんて……

「あらあら、静電気しずでんきのせいで髪が傷んでしまいましたわ」

こんなの……勝てるわけがねえ。

信じる力（後書き）

さてさて、今回は瑠璃の知られざる過去でした。

何か勝手に設定してしまいすみません（、ω、）

でも、後悔はしていない！

強者の弱点（前書き）

こんばんは、グイスです。今回は鍊斗&陽花 尋&綾子SIDEです。

強者の弱点

「なっ、何でも効かないですか?!」

ああ、おかしすぎる。全ての攻撃が効かないなんて無理だろ。何か秘密があるのかもしれないな、ちよつと探ってみるか。

陽花にあることを教え、スツと低姿勢で構える。一か八かの掛けだ、これが外れたらもう次はない。

ロン程ではないが、力には自身がある。

「こつだれんば
剛打錬羽!」

地面に叩きつけて地割れを起こす。

慣れた動きで陽花の後ろに移動。ここまでは俺の予想通り。後は陽花が指示通り動けば……

「そ、創造魔法 “ヒューマン人” × 2!」

陽花の魔法陣から2体のイケメン男性が現われる。そして相手の反応は……?

「!? こ、これは…… も、萌えますわ」

ビンゴ! アイツは腐女子だ。男性×男性が弱点。

「ど、どうして弱点が分かったのですか?」

「フツ、では、説明させていただこう。まず、相手のドレスを見ていただきたい。ヤツはBL系の缶バッチを付けている。よって、コイ

ツは男性×男性が一番の好物の腐女子だ！」

「……でも、小説だから分からない人もいます」

メタ発言は止そう、俺もそう思っていたから。ってツツコミや解説を入れている場合じゃなかった、早く進まないと。

「……なぜか勝った気がしないです」

さて、オチビの戯言は無視して、霧が晴れたから大樹へ進もう。

「んお？ 何だお前らが先か」

先に大樹の中にいたのはロンと水原だ。ってことは、残りの劔飛、咲彩、綾子に尋と魁吏と成だけか。綾子と尋と魁吏と成はわかるが、劔飛と咲彩はいくらなんでも遅すぎる。何かあったに違いない。無事だといいが……

鍊斗SIDE OUT

尋SIDE

俺の断頭斧を防ぐとは……コイツ、ただ者じゃないぞ。

「おいおい、まさかこれで終わりとかわないよなあ？」

恐怖、ニヤリと微笑むアイツは悪魔が取り憑いたみたいな感じた。

そして1つだけ疑問点がある。コイツ……本当に人間か？

「何だあ？ てめえらが来ないなら俺様から行かせてもらっぜ！！」

「ぐあっ！」

な、何もしてないのに傷が……っ！ どうなってるんだよ。

「ほう、意外と頑丈なんだな」

防御が硬い＋攻撃が見えない。これじゃどうしようもない。

「何よあの硬さ、とてもじゃないけど太刀打ちが出来ない」

「俺様は最強の防御を持つ。お前らじゃ物足りねえ」

あまりにも不幸な話だ。俺らが最強の相手と戦う、最悪以外何者でもない。

「クツクツ、てめえらだけに教えてやる。俺は人間じゃない」

それはあまりにも予想通りの発言でビックリはしなかった。したのは次の発言の、最強の盾から生み出された、最強の盾から生み出された……？ どういう意味だ？ 盾から生み出されたと言う事は、誰かに造り出された……？
ならなぜそのような研究を……

「尋君、要はこの男を倒せばいいんでしょ？」

「見ただろ？ ヤツの攻撃は見えない。避けるなんて無茶苦茶だ！」

「誰が避けるなんて言った？」

そう言っ取り出したのは……釣竿？

いや、まさか、近くに池があるからって……

「よつと」

「ちよつ、何してんの！ 戦闘中でしょ！」

「こういうときは気分転換が大事なの」

んなの、相手が待つてくれるはずがない！ よりよつてあの俺様系の人が待つと言う行為は無理がある。

「ざけやがって……死ねえ！！！」

釣りに集中してる人が他に気が付くわけがない、俺が身代わりになつて……

「どいて、尋君」

小声で俺の名前を呼ぶ、何か思いついたのかわからないが、言われた通りに退く。ズバーン、綾子さんの周りが水しぶきで隠れる。これは……

「鯉！？」

いや、ただの鯉じゃない。物凄くデカイ鯉だ。

「フッフッ、これはただの鯉じゃないわ、爆鯉よ！」

「ば、爆鯉？」

「そう、鱗に当たったらそく爆発。危険な生き物よ」

そんな危険な生き物がこの世界に……

そんな話をしていたら、爆鯉が斬撃を避け、男の胸ぐらに当たる。綾子さんの言うとおりに爆発する爆鯉。そんな攻撃で相手を倒すなんて……

「くっ……キサマア！ よくも俺様に傷を付けてくれたなあ！」

なっ、何でアイツの顔に傷が……まさか、あの爆鯉のお陰か？

「教えてほしい？」

うわゝ、めんどくさいパターンだ。

「ね、教えてほしい？」

顔を近付けてくるからコクンと頷く。ドアップ過ぎるって。

「しょうがないなあ、尋君がどうしても言うから教えてやろう」
自身有りげな発言。実際アイツに傷を負わしたから当然だが、あんな自身満々に腕組まれるとちょっとイラつく。

「実はね、アイツの弱点って攻撃した後に防御は出来ないの。つま

り、どつちかしか出来ないってこと」

なるほど、だから同時攻撃の時弾かれたのか。それなら理由も納得出来る。

「てめえら、俺様に傷を付けたからには生きては帰さんぞ……」

ドツと相手の魔力が増える。でも、相手の弱点を見つけたからには、何度も同じ手には引つ掛からない。

「たああー!!」

断頭斧で相手の腹を斬り裂く。しかし、防御が高いヤツには少しも効いてない。

「無駄だ――――!!!!!!」

断頭斧を掴まれ、壁に投げられる。

「かはっ……」

くっ……身体が動かねえ……

不気味に笑いながらフラフラと俺に近づき、腕を振り上げたその時、グサツと鈍い音がする。見上げてみるとヤツは振り上げたままだった。数秒してヤツは横に倒れこむ。

「ふう、無茶はダメよ」

「綾子さん!」

そうか、確かヤツは防御と攻撃、両方とも出来ない。腕を振る瞬間
防御が解き放たれ無防備になる。

「さすが綾子さんだ」

「褒めてくれてありがとう。さ、大樹に入るわよ」

「ああ！」

強者の弱点（後書き）

どうでしたか？ やっぱあの腐女子は無理がありましたね（ - ω - ）

そして陽花はメタ発言自重www

呪い解放

もう、ダメだ……立ち上がることにすら出来ない。くっそっ……俺らには無理だっつつ事なのかよ。

「もう……終わるか？ ふんっ、無駄な時間だった」

身体がボロボロだ。今の俺は相手の殺気の恐怖で動けないのもある。

「まつ、待ちな……さい……」

咲彩がフラフラになりながら立ち上がる。俺よりボロボロなのに……

「諦めの悪いヤツだ。そんなに死にたければ先に死なせてやる」

のしのし、咲彩の方にゆっくりと近づく。そして咲彩の頭を持って遠くへ投げ飛ばす。

「咲彩！」

「うつ……あ……」

次第に俺の感情が高ぶる。自分の心臓の音が早くなるのが気が付く。咲彩が死ぬ、咲彩が死んでしまう。そう思っていると体のそこから何かが湧きだす。

守りたい……そう感じる。でも、俺には無理だ、そんな力は俺にない。でも助きたい……どうすれば……？

『貴様には何が足りぬ？』

何かの幻聴が聞こえた。結構ヤバい状態だ。

『貴様には何が足りぬ？』

繰り返し聞いてきた。何が足りぬ、か。それは多分力だ。いや、それだけしか考えられない。

『違う、貴様が足りぬのは力ではない、——だ』

途中聞こえなかった。何が言いたかったのか俺には分からない。

「後は貴様だ」

俺の方に来る。こ、怖い……こんなのは初めてだ。

「消えろ」

死にたくない、俺は元の世界に戻るまで死にたくない！

「い、いやだ——！！！！！！！！！！」

そう叫んで目を瞑る。ああ、これで俺は死んだ、そう思っていた。けど、数秒たつても痛みはしない。本気で殺すはずのアイツが外すはずない。

そして何も痛みを感じないのを気にして目を開ける。それは俺も思ってもいない意外な結末である。

バーディアやデッドゴーレムでもないモンスターが、ヤツの黒く染まった剣を受けとめていた。

「ふんっ！」

ヤツの黒い剣が、そのモンスターによって折られた。
しかも、モンスターなのに喋ったぞ？ もう、何があったかさっぱり分からない。

「この漆黒丸が折られた……？ 貴様、何者だ？」

「俺はマスターのモンスター、フレイムロック」

俺の周りを見るが誰もいない。と言う事は俺の契約モンスターしかありえないという事か。

フレイムロック、いや、俺の契約モンスターにこんなヤツいたか、否、いない。始めてみるモンスターだ。本当に俺のなのが疑問点。

「貴様ア、楽に殺そうとしてやったが止めた。いたぶって殺してやる」

「そうはさせるか！ マスターは俺が守る。それに……」

フレイムロックは俺の方を向いてしゃがみこむ。これじゃ殴ってくださいと言ってるようなもんだ。

「大丈夫ですか？ お怪我はありませんか？」

「あ、ああ、俺は大丈夫だがアイツの方は？」

「ご心配ご無用、アイツは——」

フレイムロックが振り向くと徐々にヤツが光りだして苦しみながら消える。

「死にましたから」

この世界にはホントに驚かせてばかりだ。なぜこんなヤツが存在するのか考えるまでもない。そういうヤツが多いのだ、この世界は……

「マスター、霧が晴れました。大樹へ移動なさらないと……」

「ああ」

咲彩をおぶりながら大樹へと向かう。数分して、俺はフレイムロツクにあることを聞く。

「なあ、お前って一体何者なんだ」

「……そう言えば言ってますでしたね。俺は――」

俺の方を向いて衝撃的な事を言いだす。それは誰にも想像もしなかつただろう。

「――俺はバーディアとデッドゴーレムを合体したモンスター、と言えはお分りになれますか？」

合体した……？

頭にハテナが沢山あるような感じでうずくまる。何が何だかさっぱり理解していない俺に優しく説明する。

「マスターが避けた瞬間^{トキ}、バーディアとデッドゴーレムはあることを思い浮かんだのです。それはあなたへの思い、と言う事になります。そんな簡単に信じてはもらえないと思いますが、どうか信じ

てくれることを願い申します」

そう思うと、確かにバーディアの炎とデッドゴーレムのいかついガタイで合体したのが納得できる。でも、合体するモンスターなんて初耳だ。

「オーイ！」

「劔飛つ、今までどこほつつき歩いてたんだ！」

「ロン、瑠璃たちもそうだったからあまり攻めれない」

ぞくぞくと俺の周りに集まる仲間たち。そうか、あの時の言葉の意味って……

みんなとワイワイしている時、成と魁吏が急いでこちらに向かって走ってくる。結構急いできてるみたいだ、よほどの事だろう。

「た、大変だ！ この呪いの正体が解っちゃった！」

「落ち着くです。伊達君」

息を切らした魁吏達に、自分の魔法で水を差し出す。ようか

ゴクゴクと飲み干した二人はとてつもない言葉を発した。

「最上階にデカイ建物がある。それがきつと動力源だ」

「えっ？ お前らが壊さなかったのか？」

「尋、あれを壊すにはみんなの力がある。だから力を貸してくれ、みんな」

1分間ぐらい皆喋らない。やっぱりダメか、と落ち込む魁吏に錬斗さんが言う。

「俺がなんとかする」

その言葉に俺らは村長の助言に気付く。『錬金術師と魔導士』。

「そういう事、行くぞオチビちゃん」

「オチビ言っなです!」

漫才みたいな事を言いながら最上階へと向かう。俺らも着いていこうかなと思ったが、俺らは錬斗さん達を信じるしかない。それに……

「敵のお出ました。さて、俺らはここを死守、絶対に上に行かせるなよ!」

尋の号令で俺らはぞくぞく出てくる敵を倒しまくる。

劔飛SIDE OUT

錬斗SIDE

螺旋階段をずっと上がった先にドデカイ扉がある。コイツは俺の出番だ。

「グラビティ・フィルト!」

思いつき扉を叩く！

するとドゴンと扉が破壊される。これでなかに入れるな。

「うわゝ、すごいです……」

なかに入ると近代的な機械がたくさんある。大体予想はついていたが、まさかここまでとは……

「さて、始めるです」

陽花は意識を集中させて詠唱を唱え始める。そして俺も10分で出来る武器を作成。

10分後、俺の方は出来たが陽花の方はまだ詠唱中。

「陽花、まだか？」

「ちょうど出来たです」

よし、後は陽花の魔法陣に俺の武器を乗せて……

「集え、我が魔術の力よ」

「私の剣に纏、呪を払え」

「マジックレイン！！」

魔法陣と俺が作った即席の剣は光だし、動力源に向かって放たれる。

結果は動力源は消えた。ふう、これで呪いは解けるだろう。

鍊斗SIDE OUT

劔飛SIDE

ゆっくりと歩いてきたのは鍊斗さん達。どうやら成功したみたいだ。その証拠に段々と敵が退いてきてる。

「お疲れさまです。鍊斗さん」

「ああ、お疲れさま」

その後俺らは村に戻って村長に敵は退いたと話した。すると村長は泣きながら俺らにありがとうと言う。

数日後、俺らはまた新たな旅のためにこの村を出るところだった。

「陽花、本当に来ないのか？」

「いいです。陽花には違う大陸に向かう予定ですから」

珍しい、鍊斗さんがあんなこと言うなんて。

「あ、俺も違うトコロに行くからここでお別れです」

「そっか、また会えるといいな」

「あえますよ。きっと」

成も成なりの予定があるみたいだ。

「さあて、そろそろ出発するわよ」

急いで綾子さんの船に乗って出発の汽笛を鳴らす。

「じゃ、お世話になりました」

「気を付けるんじゃぞ」

さて、次はどんな事が待っているのか……楽しみだ。

呪い解放（後書き）

こんばんは、グイスです。

ふう、やっと一段落着いたよ。

次回はキャラ設定書いて、少しおふざけとした話を書こうかなと思っています。

やっぱりたまには一休みしないとな。

キャラ設定2

名前：赤根尋 あかねヒロ

性別：男性

年齢：19

職業：死刑執行人 エグゼキューション

特殊能力：アレス・ハントウェイク
弱者のみ気配を消す

身長：167cm

体重：59kg

髪型：襟足が少し長い短髪

髪色：茶色

瞳：黒

武器：パニッシャー（大地属性）

名前：志木綾子 しきあやこ

性別：女性

年齢：24

職業：海賊バイレーツ

特殊能力：セツド・カウス
必ず魚や相手を捕まえられる

身長：154cm

体重：47kg

髪型：シルキーロング

髪色：バイオレット

瞳：パンジー

武器：三又鉾（水属性）

名前：水原瑠璃みずはらるり

性別：女性

年齢：17

職業：狙撃手・暗殺者スナイパー
アサシン

特殊能力：超視聴

4 k mまで見通し、声や音を拾う事が出来る

身長：1 6 2 c m

体重：5 5 k g

髪型：膝まで伸びだロングヘアー

髪色：青

瞳：はなだ色

武器：ブルーローズ e t c（属性なし）

名前：伊達魁吏^{だてカイリ}

性別：男性

年齢：2 1

職業：^{ランサー}槍兵

特殊能力：心臓必中

槍に掛けられた呪いによって主の魔力を食う事で因果を書き換え放つと同時に心臓に必中させる

弾弾き

弓矢、弾丸、魔術など自分に向かってくる飛び道具を死角であつても回避できる

身長：178cm

体重：64kg

髪型：癖毛

髪色：茶色

瞳：オレンジ

武器：グングニル（属性なし）

キャラ設定2（後書き）

こうやってみるとロンが一番年上なんですね。

意外w

るりのヤンデレにつき(前書き)

はい、今回は短いです。

るりのヤンデレにつき

「……」

こんにちは、瑠璃です。瑠璃は今船のなかにいます。そしてここはロンの部屋です。

「……」

スヤスヤ寝ているロン、可愛い。そして襲いたいです。ああ、理性が吹っ飛びそう……

「……ロン、愛してる」

瑠璃がキスしようとしたら避けられました。もしかして起きてる？ むう、今度は色んなイタズラでロンを襲う。

「……って何してんだよ！」

「やっぱ起きてた」

「んな気配立てたら誰でも起きるわ！」

そこまで立てたのかな？ 自分でもわからない。でも、ロンがそこまで気付くってのはやっぱり愛……ポッ。

「つか、何してんだ？ こんな夜遅く俺の部屋に来て何か用なのか？」

「瑠璃の愛」

「いや、違うから」

意地悪するロンもいいかも……やっぱりロンと瑠璃は惹かれる運命。

『大変よ、バルコニーにてモンスター出現、今すぐ出撃して』

瑠璃とロンの邪魔するなんて……

その時の瑠璃は覚えてない、記憶が飛んだみたいだから、でも覚えてるとしたらその後のこと、モンスターの残骸がそこらじゅうに落ちていた。

翌日、瑠璃達とはある島で休憩することになった。その島は昔無人島だったらしく、今は結構人が集まっているらしい。

「およゝ、結構人がいっぱいいる」

綾子が辺りを見回す。何かの大会がやっているのかな？ そんなことを考えていると、ピストルの音が聞こえる。

『さあ始まりました24時間地獄の耐久レース、実況は私、ガワラ
Ⅱコブリンと』

『解説のヤンマⅡクイーンズがお送りいたします』

24時間地獄の耐久レース？ 何か言葉的にスゴそう。

「なんかトンでもない時期に来ちゃったわね」

「知らずに来ちゃったんだから仕方ないよ」

咲彩と天月がイチヤイチャして喋ってる（瑠璃だけが……）

「さあて、食料調達にでも行ってこようかね」

ロンが1人で行こうとしている。瑠璃も行く、ロンが浮気するといけないから瑠璃も付いていかなきゃ。

瑠璃達が歩いて10分が経った。今のところロンに近づく女はいない。

「すみません、このトマトとカボチャ、それとセロリも」

これで何作るんだろう、これだけじゃ何も作れる気が……

あ、今度は肉屋に入った。

「ブタの肩ロースの500を10個、鶏の手羽先を50本」

そんなに買っただ。

結局は何を買うのかわからなかった。そして変な宿屋に入る。あれ？ 何で宿屋に入るんだろう。何か人でもさがしてるのかな？

「……他の女の人いる」

これは婚約者として放っておけない。瑠璃のロンは誰にも渡せない。勢いでその宿屋に入った。その女の人はロンと楽しく喋ってる。

「殺す……」

ブルーオーシャンであの女の頭をぶち抜く、そうしようとしたが、

ロンがキングカリバーで防ぐ。そんな、瑠璃よりあの女が良いなんて……許せない。あの女を殺してロンも殺す。そしてロンは瑠璃のモノだって……

「やめる瑠璃、何があった」

「瑠璃のロンに近づくムシは削除」

「は、はあ？」

何か困った顔をしているけど気にしない。だって、ロンは瑠璃だけ見てくれればいいもん。さ、ロン。瑠璃と一緒に死のう。瑠璃の、瑠璃のために。

「ちよつ、な、何で乱射してんだよ！」

「好きだから」

「言ってることやってることがムチャクチャだ！」

関係ない、だってもうすぐで瑠璃たちは1つになるんだから。

「落ち着け瑠璃！」

ロンの一言で瑠璃は乱射を止める。

「瑠璃は……ロンのために——」

「何があったか知らないが、彼女はここの宿主の娘さんだ。理由としては綾子に頼まれてだな——」

「良かった、瑠璃を捨てたんじゃなくて……」

「俺が……捨てるはずないだろう」

瑠璃、ロンを好きになって良かった。もう、後悔はしていない。

るりのヤンデレにつき（後書き）

あれ？ 何でこんな終わり方になるの？
ってツッコミ入れる人は
いないよね？ 答えは聞いてないけど、

綾子の姉妹登場！

「暇すぎる」

ある日の昼食に妙なことを言いだす劔飛。無理もない、船を出航してからモンスターどころか他の島も見当たらない。フレームロックの修業をしようとしてもモンスターがいなければ話にならない。そんな劔飛に綾子は一枚の紙を渡す。その紙の一番上のタイトルに魁吏以外全員呆然とする。

『バトル 一番強いヤツは誰だ！』

なんとも分かりやすいタイトルだ。参加者資格を見ても誰でもOKと言う文字が視覚に入る。少し怪しいと思う一行は不参加にしようとする。しかし、一番下に優勝景品の『10万G』^{グイル}に一行の目が変わる。グイルとは日本円にして1G＝1000円にあたる。

「す、すげー、これで新しい武器も造れる！」

「フフフツ、燃料も買えちゃうわよ」

「うめえモンも食えるな」

鍊斗、綾子、ロン、それぞれの考えが口に漏れる。よほど嬉しいのだろう。

その3人の口が「よし、参加だ！」と強制的に全員参加になった。

翌日、大会のある島へ急行。約4時間ぐらいで着く結構近くの島だった。早速受付をして選手の控え室に移動した。その中に劔飛が見

覚えのある人がいる。それは咲彩の過去^{なか}に入っただきの女性だ。

「てめっ——!？」

「何ですか？ 初対面に向かって胸ぐらを……しかも汚い言葉を使
って……」

背負い投げをして劔飛を軽々と投げ飛ばす。いくら後衛でも男子を
軽々と投げ飛ばすなんておかしすぎる、そんな考えをする尋。

他の選手達もこの女とは戦いたくないと願わんばかりに身体を震わ
す。

「劔飛、あの女誰？」

「……えっ？」

劔飛は予想もしてなかっただろう。まさか自分の過去に会った人の
記憶が全くないのだから。

何かおかしいと思った劔飛はその女の跡を追う。しかし、右に曲が
った瞬間彼女の姿が消える。次の瞬間、後ろから気配がするのに気
が付く。後ろを向いてみたら女性が立っている。あれ？ 確かこっ
ちに行ったはずじゃ、その台詞が繰り返す。

「あらあら、私を追い掛けるなんて……よほど早く死にたいのです
わね」

妖刀で劔飛の首を狙う。劔飛は力を入れようとしても力が出せない
状態だ。無理に抜こうとしても首が斬られる可能性が高い。決して
そのような命懸けの挑戦をしてはいけないと思うが身動きが取れな
い。そこで劔飛はある確信をした。コイツは絶対あの時の宇鍊刀香

だと。

「ザコには用はありませんが、この際仕方ないですわ」

ゆっくりと妖刀を首に当てようとした瞬間、槍が刀香の頭めがけて投げられる。それをいとも簡単に避ける刀香。そして投げた本人は魁吏であつた。なぜここに魁吏がいるのかと言うと、劔飛の行動が怪しすぎるので付いていったら案の定。

しかし、これで1：2、さすがの刀香も2人相手じゃキツイ、そんな甘い考えが後々後悔することになるだろう。

「私も戦いたいのは山々ですわ、ですが、ここで問題が発せれば出場が出来なくなりますわ」

そう言つて妖刀を収める。劔飛達にとつてそれは幸いだ。そして魁吏には分かつていた。刀香が何者なのか、その妖刀に異様なオーラが漂っている事を……

試合開始は明日の昼頃。その間まで暇している劔飛達に新たな招かざる客が現れる。その正体は、ピンクの髪をしていて瞳はマリンプール、何かと綾子と似ている。

「あ、綾子ちゃんだー」

そう言つて彼女は綾子を後ろから抱きつく。抱きつかれた綾子は黙つて淡々と食事を続けている。

半面、劔飛達も何が起こっているのかさっぱり分からない状態であつた。それはそうだろう、いきなり現れた見知らぬ人に知り合いがいきなり後ろから抱きつかれたら誰だつてそう思つのが普通の反応。

「も、お姉ちゃんがせつかく探しに来たのにその態度は何？」

「……何の用なのよ、お姉ちゃん」

その場にいた全員が「お姉ちゃん！？」と叫ぶ。他の人から見れば何事だ、の目が綾子達に向かう。痛い視線に耐えながら実の姉妹が聞き出す劔飛。

「えっと、綾子さんとそちらの方……」

「姉妹よ、残念なことに」

「え、綾子ちゃんひどーい」

そんな茶番をしていると、魁吏が恥知らずなことを言う。

「年はお幾つなんですか？」

失礼にもほどがある、一行がそう思った瞬間。いつのまにか綾子の姉は魁吏の後ろに立つ。凄まじい速さとだ、皆思っているが、綾子だけは思っていない。やれやれ、と口に出し、姉のところに行く。

「海姉、言いたいことは分かったから手を離そ」

綾子に言われ渋々手を離す。何か言いたそうな顔をしているが、あえてスルーする綾子。そして地雷を踏んだ魁吏は、ガクブルしている。よほど怖い思いをしたのだろう、今の魁吏を見て誰もが思う。

「あれ？ ここにいるってことは海姉もしかして……」

「そうだよ、お姉ちゃんも出ようかなって思っの〜」

「はあ、まあいいわ。改めて紹介するわ。私の姉の……」

「水澤海音です、よろしくね〜」

「えっ、ちよっ、綾子の姉なのに名字が違っってどういつこと？」

「うん、まあ、実は私たちの親は離婚しちゃったんだ。私は母、海姉は父に引き取られちゃったからね」

「あ、いや、すいません。辛い過去を……」

スゴい事を発言する綾子に、その話題を振った咲彩は面目なさそうに頭を下げる。それでも綾子はいいのよ、と言って許してくれる。日もいい頃合いになり、そろそろ宿に泊まるご一行。海音は別の宿で泊まることになっているので、ここで別れを告げる。

「ふう、結構食った」

帰り道、ロンが腹を擦って満腹そうに言う。それを見た瑠璃はロンに夜の運動をしようと言う。さすがに止めるロンだが、尋がこう言う。

「あゝあ、何だよ。つままないな」

「つままないとはなんだよ！ さすがにマズイだろう！」

「瑠璃は……OK」

「お前がOKでも俺がダメなの！」

等とハレンチな会話が後ろから聞こえる中、咲彩はあることを思っている。

「夜の……運動……劔飛と……」

ボンツと聞こえそうな感じに顔が赤面する。純情な少女はハレンチなことを考えると顔が赤面になるのだ。しかし、彼女の赤面は頭からも煙が出るぐらいかなりの赤面だ。

「大丈夫か？ 咲彩」

「だ、だ、大丈夫よ！ 別に劔飛のことなんて何にも思っていないだからね！」

「は？」

「あ、いや、な、何でもない！」

いきなり劔飛の話題になったと思いきや、今度は何でもないと来た。相当変だと思い込む劔飛は当然咲彩の気持ちもわからないだろう。

綾子の姉妹登場！（後書き）

瑠璃がエロい娘になった！ 大変だよ！

さてさて、新章始まりましたトーナメントバトル編。いやゝ、楽しみですねえ。

オリキャラもどんどん募集しちゃってます。日本の名前だけでなく、外人の名前もOKです。

キャラ投稿の仕方は活動報告にあります、それと質問コーナーも受け付けます。このBWで疑問がある方は感想欄へ。

トーナメント 第1回戦

大会当日、最初の組み合わせがモニターに移る。最初の試合はロンVSアルトⅡKⅡセリックと言う精霊^{エレメンター}使いだ。接近戦のロンにとっては好機な試合。

「初めまして、Mr・ロン」

「へっ、何がMr・ロンだ。馴れ馴れしい」

ロンとアルト以外リングの外に出る。瑠璃がリングの外に出ようとしたとき、ロンが呼び止める。何かな、と思い振り向くとロンの唇と瑠璃の唇が重なる。

「んっ……あむ……」

「絶対に勝つ」

「……頑張って」

ニカッと笑ってリングへ戻るロン。そのキスの力で何倍にも増す。

「おやおや、いきなり見せ付けてくれます——」

すでに詠唱して出した精霊を使って不意打ちを狙う。

「——ね！」

サラマンダーの火炎でロンは炎に包まれる。誇りきった顔で去ろう

とするがレフエリーに止められる。なぜだと抗議するアルトだが、ポンとアルトの肩に手が乗っかる。振り返ってみると、ロンが炎を纏って立っていた。本来ならありえないのだが、瑠璃とのキスで防御・攻撃が上がったのだ。

「あ、ありえない！ この僕の炎が効かないなんて！」

「いや、実際効いてるぜ？ でも、まだ劔飛の炎が熱い」

キングカリバーを大きく振り上げる。するとキングカリバーが燃えるように紅くなっていた。ロンは振り上げたキングカリバーをおもいっきり振り下げる。

戸惑うアルトに容赦なしに襲い掛かる斬撃。いつものと違うロンと感じる劔飛達だが、ロンと関わりのない者に比べるといたって普通の状態。それほど絆が高いのだろう。

「ご、ごめんな——」

「謝って許されるとでも？」

「ひっ、ま、ママ……」

「^{キング}王よ、この者に^{ジャッジ}審判を」

キングカリバーを地面に叩きつけ、カチッ、カチッと5回音がする。するとキングカリバーの形状が炎の形になり、熱気もする。

「これって……」

尋が思い出すようにつぶやく。

「燃えよ、フレイム・セイバー火炎の剣」

形状が変わったとともにロンの姿・装備も変わっている。髪は金から深紅になり、膝まで伸びた髪。身体には鎧を纏っている。

「そうか、あのキングカリバーはロンの感情とリンクしていて、それによって属性が変わるんだ」

炎は怒り、水は悲しみ、雷は喜び、風は楽しみ、それ以外にもあると言われているが未だ不明。

現在ロンが抱いてる感情は怒り。不意打ちを食らったからそれで怒っている。

「そ、そんな……そんなの反則だよ！」

「さあ、大人しく俺に殺されるか、不意打ちやら卑怯な手を使って逃げているだけの人生を送るか」

「い……ごめんなさああああい！！！！！！」

泣きながら去るアルト。これでロンは第2回戦進出。

「お疲れロン」

「……ああ」

リングに下りるや否や、ロンは体調がすぐれない。そう、今ロンは覚醒をしていたのだ。覚醒は体力などが大きく消耗する代わりに、職業によって装備なども異なるが、職業の真実の姿ホントになる。

「とりあえず、ロンは2回戦まで休ませる必要があるな」

錬斗がロンを抱き抱え、移動しようとした時、瑠璃がロンの肩を支える。

「瑠璃が運ぶ」

そう言ってせっせとロンを宿に運ぶ。やはり心配なのだろう、好きな人が出来てその相手が今倒れているんだから。しかも、ロンの体格と合わないからズルズルと引きずるしかない。

「ここは瑠璃に任せましょ、私たちはバトルに専念よ」

ロンが休んでいるから今の最年長は綾子だ。それなりの責任感はある。だからてきぱきと動くのだろう。

次の対戦は尋と豪烈神こうれつしん 彩華サイカだ。尋は彼女をとんでもない人だと想像した。

「んゝ、すごい殺気だな」

「へえ、アンタがあたしと戦う相手が、何か強そうだな。よろしくな」

「そうだな」

リングに移動し、両者とも構える。

「開始！」

審判の合図とともに2人とも動く。2人とも同時だからどちらが有利かわからなくなる。

「エレキッドウェイブ!!」

彩華は右フックを打つと、その手から電撃が出る。避けることが出来ずもろ食らう。

「なかなかやるねえ、でも、俺も負けちゃいないよ!」

パニッシャーをブーメランみたく彩華に投げ付ける。しかし、彼女は左の足でパニッシャーを返す。それに絶句する一同。尋のバトルスタイルはメンバー内で知っているのは魁吏と鍊斗だけだ。

「尋の攻撃もスゴいけど、あの彩華って子もすげえ」

「チッ、チッ、尋の攻撃はまだまだだよ、あれは敵の能力を計るためだから力の半分も使ってないはずだ」

劔飛の感想に鍊斗が返す。それに絶句する一同は一斉に尋に注目する。劔飛はあれで半分も使っていない、そう呟く。

「あれ? そんなもんなの?」

「まさか、これは単なるお遊びだ。俺の強さはハンパないぜ!」

ニカッと笑ってパニッシャーを地面におもいつき突き刺す。

「ギガロック!」

どこから出てきたのか、岩が幾つにも分裂し、彩華にめがけて攻撃。

「甘い甘い、力の消滅――！」
パワーアニシユ

しかし彩華は素手で岩を破壊。彼女のパワーは少なくとも尋よりある。どう考えても尋が不利、誰もがそう思っているが魁吏と錬斗だけは違う。魁吏達は彼の本当の強さをしているからだ。

「やっぱそんな簡単にやられるわけないよね」

「何？ 怖じ氣ついたの？」

「いんや、ゾクゾクするだけだ」

「そうなの？ まあいいや、そんなお喋りより早く戦おうよ」

「だ、な！」

横に斬り付ける。対する彩華も純白のプロテクターでガード。その攻防を約10分間続けている。さすがの2人も体力の限界だ。

「やるね、アンタ」

「そらどうも、さっさと決めさせてもらっぞ」

「だね」

お互いに構えて渾身の一撃。一瞬煙が出てどちらが立っているのかわからない状態だ。どっちだと疑問視する観客だが、すぐに煙がなくなる。そして最後に立った者は……

「はあ、はあ……勝った……」

彩華だ。紙一重の差で尋が負けたのだ。

「つ、強エな。お前」

「アタシはアンタのほうが強いと思ったけどな」

互いに握手してニコツと笑う。これほどいい試合はないだろう。そして、これからの試合もいい試合が続きだろう。

トーナメント 第1回戦（後書き）

はい、スランプ状態のヴィスです。始まりましたねトーナメントバトル。第1回戦。どうでしたか？ 最後はちよつと無理矢理な感じがしましたが……

感想を書いてくれる方にはホントに感謝しております。まだまだ未熟者ですが何とぞよろしくお願いします。

さて、話は変わりますが、私ヴィスは18歳を迎えました。そこですが、ノクターンを書いてみたいと思います。誰×誰を書いてほしいか感想にて書いてください。ちなみに最初は瑠璃×ロンです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8845u/>

BATTLE WORLD

2011年11月17日18時01分発行